

インド、グジャラート州ジャムナガル地震復興活動

第3回「国際参加」プロジェクト報告書



International Cooperation Project
A Report on the Western India Earthquake Disaster Area Relief Activity

2004年2月21日～3月5日



地域文化研究センター

International Center for Regional Studies

天理大学

Tenri University

第3回「国際参加」プロジェクト報告書刊行に寄せて

天理大学 学長 橋 本 武 人

天理大学の国際参加プロジェクトは、折しも大震災に見舞われたインド西部のジャムナガール地区を舞台に、2001年より2003年までの3年間、これに参加する学生たちの国際性と宗教性を同時に涵養するプログラムとして続けられた。本書はその3回目の活動報告書である。

もともと災害救援として始まったとはいえ、このプログラムは義援金や援助物資を運び届ける類いのものでない。それは貯水のための河川堰建設や土囊のハウスの建築など、現地の人々が自立復興へ向け必要とするものを、ともに汗して建設するところに特色をもたせたものである。

言葉も違えば習慣も異なる異文化圏の人々との共同作業、恐らくは社会の底辺にある人々との屈託のない交わりを通して、学生たちは国際性を養う上で多くのことを学び、物質文明が置き去りにしてきた心のゆたかさを取り戻している。また、貧富の格差が極端な世界の縮図ともいべきインドの社会を垣間見ることは、何かにつけて恵まれている日本では考えられないような現実を知ることになり、広い世界に視野を拡大するとともに、自己自身を顧みる貴重な体験となっている。

建学の精神の一環として日ごろ唱道する「他者への献身」を国際的なスケールで実践するこのプロジェクトは、昨年度よりカリキュラムの中に設けられた国際協力論の実習プログラムに位置づけられた。ちなみに、本報告書には、新科目「国際協力論」を受講した学生たちの感想文も、国際参加プロジェクトに参加した学生たちの手記とともに掲載されている。

なお、国際参加プロジェクトは、この3年間続けてきたインドからその舞台をフィリッピンに移すべく、鋭意準備に取りかかっているところである。願わくは多くの学生諸君が国際協力論を受講して世界に眼を見開き、国際参加プロジェクトの実習を通して、本学の教育目標として掲げる国際性と宗教性を涵養して欲しいと思う。

最後に、この3年間学生たちを引率された諸先生、技術指導で現地へ赴かれた有志の方々に御礼申し上げるとともに、参加してくれた学生諸君の労をねぎらい、このプロジェクトがますます発展することを願っている。

自分を外部からみることは？

天理大学後援会 会長 森

進

38年前になるが、私は天理大学の学生だった。英語の勉強だけに毎日5時間を費やしていた。それでも思うように英語が話せなかった。授業でアメリカ人教授が英語で喋っているのを聞きながら、「どうしてこの人は次から次へとよどみなく英語が出てくるのだろうか。ひょっとして天才ではないのだろうか」と真面目に考えた。それに比べて私はこんなに勉強しているのに何故英語が話せないのだろうか、と深刻な自己嫌悪に陥ったことがある。

卒業後、2年間のアメリカ留学の機会があり、留学中は日本語を使わないと決め、実行した。留学生活3ヵ月後位には英語を使うのにほとんど不自由を感じなくなった。その時になって初めて、「アメリカ人は天才ではなく、自分と同じ人間なのだ」、と気が付いた。相手の喋る様々な種類の英語をきちんと理解はしなければならないが、自分の英語は同じ人間ならば誤解を与えない程度で話せば十分なのだ、しかも自分は日本人だ、と思えるようになった。そうすると、今まで英語を話すのに異常なほど重圧を感じていたのが嘘のようにだれとでも英語を気楽に使えるようになった。それから自分の英語力が付いたような気がする。

そこで、言葉を使う重点の置き所が「いかに」～方法～から「何を」～内容～に変わった。それとともに、相手に対する、「思いやり」、「優しさ」、「親切」という、言葉よりももっと大切な気持ちが心の根底にあるべきことを改めて考えるようになった。常にお互いが相手のことを考える、「互い立て合い、助け合い」の精神、行動の意味が理解できるようになった。

もう1点、私が日本からアメリカに物理的に移動し、生活することによって得たものは、「自分を客観視すること」ができるようになったことである。自分が生まれ、育ち、属する国、地域社会、組織、団体の内部だけで生活していると、分かっているつもり、知っているつもりと思っていたことが実際には分かっていない、知っていない、したがって、その説明も十分にできないことを痛感させられた。

そのために、私は、ひと、ものを理解する時には、自分のそれまで持っている全ての経験、知識、先入観などをいったん横に置き、心を空っぽの状態にして、相手を理解することの大切さを学んだ。それによって、今まで主観的な立場からしか考えられなかった自分、内部を客観的に第三者の立場から観察し、考えることができるようになり、また内部の説明も分かりやすくなるようになった。同時に、その態度で自分、日本、日本文化、天理教などの内部を外部から探ることによって、人間、国家、生きがい、死、文化、宗教などの意味を深く、広く知ることにつながったように思う。

実は、上記のことを裏付ける辛い経験がある。最初のアメリカ留学のときに、「天理教の話は授業でしてください」、と恩師の教授から依頼を受け、即座に承諾した。ところが、いざ準備を始めようと思ったら、いかに自分が教理を体系的に知らないかを思い知らされた。信仰心はあったが、教理は勉強し

ていなかった。断らざるを得なかった。そして、帰国後は、留学中に学んだことを基に、猛勉強した。その結果、再留学の時にはアメリカの大学で学部生に教える立場を得ていた私は4回も異なった正式な授業で天理教の講義をすることができた。最初の留学の悔しい経験を再留学で活かした喜びを味わえた。

フィリピンで活動する学生諸君とは、形、内容は異なるが、私はアメリカで合計4年半過ごした。その結果、上記の2点を学んだ。これは私の一生の宝である。この宝は自分が日本という国から外に出るチャンスがなければ、おそらく得ることはできなかったと思う。この度のフィリピンでの活動に参加する学生諸君は、日本から外に出ることによって、今までとは異なった世界観を持てるようになると確信する。この世界を少しでも平和にできるよう貴重な経験をこれからの人生に活かしていただきたい。そういう人が天理大学の学生の中から今後数多く巣立つことを心から願う。そのための支援は後援会として惜しまない。

付記的な内容になるが、今年から天理大学「国際参加」プロジェクトの活動拠点がインドからフィリピンに変わった、という話を聞いた時、不思議だなあ、と思った。私は、カリフォルニア大学サンタバーバラ校宗教学部博士課程に在籍していた時、教祖100年祭の海外帰参者受け入れ要員として、年祭前年の1985年12月末に家族とともに一時帰国した。年祭が終わり、その年の6月にタイに行く仕事を与えられた。ところが、タイへ行く途中、飛行機の中で心臓に異常を感じた。止む無く台湾に入国した。しかし、ビザを持っていなかった私は不法入国者として当局の公安員に常時監視されながら3日間台湾に滞在した。病院にも行ったが、頻脈と不整脈はいっこうに治まらなかった。その時に、同行していたのが現在の天理教フィリピン出張所長、山岸氏なのである。その時私は台湾で死ぬと思った。彼に私の心中を語っておかなければと、人生、信仰、海外布教などについて私の思いを彼に話した。

依頼を受けて、私は今この文章を書きながら、人生の不思議を感じている。私が後援会の会長になったのは自分の思いではなかった。その時には息子は4回生であり、今は既に卒業し、教会本部の海外部で勤めている。したがって、私はこの6月で会長としての立場を退くことになっている。この時期に天理大学「国際参加」プロジェクトの活動拠点がインドからフィリピンに変わった。そこの出張所長が私とは切っても切れない仲である、上述の山岸氏である。生きるということは人と人のつながりの連続である。だからこそ、我々は人の出会いを大切にして、「互い立て合い、助け合う」必要があるのではないだろうか、としみじみ思う。他人は他人ではなく、自分自身の鏡そのものである。他人の苦しみは自分の苦しみであり、一方他人が味わう喜びも自分のものであると思えるような心を育てる努力をしながら生きたいと思う。そのようなことを学生諸君がフィリピンでの真剣な活動、貴重な経験をおして一生の宝として持ち帰るのを楽しみにしながら本稿を終える。

報告書発行に際して

地域文化研究センター長 井上昭夫

天理大学の再改革のキータームは「国際化」、「他者への献身」、「教学協同」などであった。その理念にもとづく教員の共同研究と学生への教育、そしてその実践を目的とした「国際参加」プログラムが、地域文化研究センター発足と同時に立ち上げられた。センター長に就任して筆者が最初に企画・実践に関わったのが「国際参加」プログラムである。

「国際参加」プログラムであるから、まず地域を決定しなければいけない。報告書第1号でも述べたように「国際参加」とは、何らかの形で外国人を対象とすれば国内でも可能である。しかし、海外の方が教育的インパクトも学生にとって言うまでもなく強烈である。そこでまず中国の西安市を中心とした黄河流域を選び、半砂漠地帯での植樹プロジェクトが頭に浮かんだ。

その理由は、筆者が副会長をつとめる1996年に発足した日本国際経営文化学会（会長村山元英千葉大学名誉教授）と中国黄河文化経済発展研究会（会長ズアイ・チェ・ミン初代中国アメリカ大使）とが共催して1997年に西安と北京において黄河流域の環境問題と開発についてシンポジウムを開催し、これを契機として毎年テーマを代え学術情報交換や現地視察を重ねていたからである。天理教内のNGOにおいても、その人脈を窓口として毎年黄河流域への植樹運動を行っている。西安を中核地点とした黄河流域での植樹活動は、その地域が文化歴史的にも本学の所在地である大和と関係が深いだけに、「国際参加」プログラムの有力な候補地として注目された。

しかし、本センターにおいては第1回の「国際参加」プログラムの対象地としてインドを選んだ。それは第1に、中国と違い天理教海外部との「教学協同」という条件が、第1回隊の報告書に見られるように整っていたからである。そして第2の理由としては、当時おやさと研究所が、アメリカの国境なき建築家機構（Builders without Borders）の協力を得て進めていたアースバッグ・シェルターの天理や神戸での実験棟モデルが、インド・ジャムナガール地域の大地震被災者への救援シェルターとして適応可能だと予測されたことなどが挙げられる。

中国や台湾も次の候補地として議論されたが、準備期間が十分でないという理由もあって、平成16年度はフィリピンがセンター会議において候補地として決定した。インド第3回隊報告写真展開催と同時にいま公募が行われている。

インド隊の足かけ4年にわたる貴重な体験をさらに拡充し、他地域への関心を高揚するために、さらには今後の「国際参加」プログラムが内外ともに発展して行くためには、この際どのような対策が学内においても理想的であるかを考えておく必要がある。そのためには、参加学生のレポートから読み取れるように、インド隊の教育実績を正しく評価し、加えてその活動が社会へのメディア広報の分野において、極めてひろく校名発揚に有効であったことを重く受け止めておきたい。

目次

第3回活動報告書の刊行にあたって

天理大学 学長 橋本 武人	I
天理大学後援会 会長 森 進	II
地域文化研究センター長 井上 昭夫	IV

● インド地震の救援・復興を支援する活動の経過	1
● 第3回「国際参加」プロジェクト	2
1. これまでの活動成果	2
2. 事前調査のための訪問	3
3. 第3回プロジェクト活動の実際	4
4. 「国際参加」プロジェクトと「国際協力論（実習を含む）」の開講	8
5. まとめにかえて	8
● 参加学生レポート	10
1. 第3回「国際参加」プロジェクト参加者レポート	10～20・29～34
恵まれて生きていることを自覚した、インド・プロジェクト(苑田昌嗣)／インドの印象(宮島綾子)／三度目の参加、自問自答の答え(渡辺豪)／なぜ2回目のインドに参加したか(本田光美)／参加して得たもの(西山拓司)／インド西部地震被災地復興活動を終えて(西村俊祐)／何ができるか、自信をつけさせてくれたプロジェクト(松尾晃宏)／自分自身にとってのインド、そしてプロジェクト(中山真哉)／あたりまえの生活が貴重だと感じさせられたプロジェクト(佐藤綾香)／このプロジェクトに導かれたことに感謝(野田麻美)／観光では味わえないプロジェクトの内容(沖佳奈代)／自分をみつめなおしたプロジェクト(田中映理子)／喜びを与えてくれたプロジェクト(高木宏明)／私の「国際参加」プロジェクト(久保智美)／国際協力論と「国際参加」プロジェクトへの参加(矢澤智子)	
2. 「国際協力論（実習を含む）」履修者の授業レポート	35～40
国際協力論を受講して—学習は平和への第一歩—(鈴木和果菜)／授業を終えて—男一人の満足感—(長谷川隼人)／国際協力論の授業を受けて—インドの誘いのポスターに惹かれて—(矢澤智子)／授業で学んだこと—気持ちの高まりをもたらした内容—(多田維久子)／実習報告：個を大切に活動、被災地NGO協働活動センターを訪問して(多田維久子)／実習報告：すべてではなく、約でもなく、一人ひとりの声に耳をかたむける活動(鈴木和果菜)	
● 写真でみるインド、グジャラート州ジャムナガルでの活動	21
現地でテレビ放映された本プロジェクトの紹介「画面」	22
完成したアースバッグによるボンガ図書館—バラチャディ小学校—	23・24
ボンガ図書館式典	25

天理大学チェックダム—バラチャディ村—	26
ボンガモデルと竹、日本庭園—アンキット村—	27
他者への献身—「国際参加」3年間のあゆみ— 2001年～2004年3月	28
●資料編	41
「群衆井戸へ」(干ばつが続くグジャラート州の様子を伝える新聞記事)	42
「国際参加」プロジェクトへの参加者募集のためのパンフレット類	43～45
ジャムナガルJJSSから天理大学に届いた招請状	46
第3回「国際参加」プロジェクト参加者名簿	47
第3回「国際参加」プロジェクト日程表	48
荷物に貼り付けたヒンドゥー語による活動趣旨	49
アースバッグによるボンガ図書館設計図	50
「国際協力論(実習を含む)」の初年度シラバス	51
「国際協力論(実習を含む)」履修の呼びかけ	52
本プロジェクトを紹介する新聞記事(邦文)	53
本プロジェクト活動を紹介する現地新聞(インド、グジャラート語)	54

インド地震の救援・復興を支援する活動の経過

2001年1月26日、インド西部に位置するグジャラート地方で発生した地震は、死者2万人、負傷者17万人をもたらすものでした。14歳未満の児童300万人が被災し、この地方の半数にあたる15,000の小学校が被災する被害をもたらしました。1995年に発生した阪神大震災と比べても死者、負傷者数は3倍となっていました。わが国も日赤、医師団、政府の救援活動などとともに、NGOや宗教団体等（天理教海外部国際たすけあいネットを含む）のさまざまな民間機関が救援のための活動を行いました。

この時期、天理大学は、全学の学科編成を含む改革に着手しはじめており、建学の精神を実践する教育・研究組織とその担い手づくりの必要性が提起されたところでした。インド地震被災地救援を「国際参加」プロジェクトとして取り組む提案が井上昭夫おやさと研究所所長からだされ、理事会でも承認され、2001年7月に10名の事前視察調査団を現地に派遣しました。その後、同年8月、学生に参加を呼びかけ、第1回「国際参加」プロジェクトが実施されました。

初年度、おやさと研究所が中心となって企画、実施した本プロジェクトは、2002年度からは、全学的な学部学科編成等の改革に先立って同年4月に設置された地域文化研究センター（井上昭夫センター長）にこの活動が引き継がれました。設置にあたり、センターには、共同研究部門、教育部門とともに、「国際参加」プログラム推進部門の3部門がもうけられました。

「国際参加」プログラム推進部門は、世界各地で天理教教会やミッション・センターなどが推進してきた文化、スポーツ等の活動と協働し、また現地NGOをカウンターパートナーとして、現地のニーズにそった活動をしながら、自主的に参加した学生、教職員がさまざまな「他者への献身」の思いとその実践を行うことを目的としています。国際性と宗教性のレベルアップを学生に身につけさせる、他にはみられない天理大学独自の国際教育企画と位置づけています。



2001年7月事前調査隊がみた地震被災地

この理念のもとに、第1回の後、第2回、第3回のプロジェクトが毎年行われました。今回の第3回「国際参加」プロジェクトの活動をもって、インド、グジャラート州ジャムナガルで実施してきた地震被災地の救援・復興の活動には区切りをつけます。

本報告書は、2004年2月～3月にかけて実施した第3回のプロジェクトを中心にして、これまでインドで展開してきた活動を紹介します（添付 他者への献身 ― 「国際参加」3年間のあゆみ参照）。

第3回「国際参加」プロジェクト

隊長(地域文化研究センター) 近藤 雄 二

1. これまでの活動成果

最終年度となった2004年の活動について紹介します。第3回「国際参加」プロジェクトは、過去2年間と同様、グジャラート州ジャムナガル市バラチャディ村を活動場所としました。カウンターパートナーは、ジャムナガルを中心にチェックダム建築と教育・福祉支援活動を行うNGO機関、Jamnagar Jilla Samaj-Kalyan Sangh（以下、JJSSと記す）です。

この団体は、ジャムナガル市の初代市長でもあったジャクバイ・タンナ氏が1964年に発足させたものです。ジャムナガルを中心に幼稚園の設立、成人教育などの社会福祉教育活動を行ってきました。ジャムナガルを含むグジャラート州の識字レベルは、男女差がおおきく、全男性の80%が字を読むことができるのに対し、女性の識字率は最近の統計でも58%です。過去10年間の識字率の伸びは、インド平均を下回る9%であることが報告されています。このような状況下のなかでJJSSがはたす役割は大きなものとなっています。2001年のグジャラート州の大地震後は、崩壊した校舎の再建や保水のためのチェックダム建設をとおして被災地復興に意欲を燃やしています。タンナ氏の息子嫁にあたるレッカ婦人が天理教の信者であることもあり、天理教海外部国際たすけあいネットもJJSSを介して、地震復興のために井戸やチェックダム建設のための支援をおこなっています。

この地域は、地震前から干ばつに見舞われており、飲料水はもちろん農業用水の確保が緊急課題となっていました。飲料水確保が困難な状態下で発生した地震は、生活被害の拡大を招き、救援、復興活動における水確保は大きな課題となっていました（資料編 新聞記事参照）。

JJSSは、先に記したようにチェックダム建設に力を注いでいます。降雨があっても地表面からアラビア海に流れ去ってしまう雨水を、水の流れに沿った土地に堰をつくり、保水のためのチェックダムが非常に有効性を発揮しているからです。

2001年度、地震復興のための第1回目の活動は、JJSSと学生達の手で天理大学チェックダムをつくりあげました。同時に安価で耐震性があり、技術的にも誰にでもつくれるアースバッグ（土嚢）によるボンガモデルハウスを建築し、このボンガを私たちの活動のツールとして、紹介するとともにボンガを必要とする応用現場をJJSSに依頼していました。



チェックダム建造に着手（2001年8月）



ボンガモデルハウスの起工式（2001年8月）

2002年の第2回プロジェクトは、モデルハウスに隣接して日本庭園をつくり、竹の植樹をするとともに、ボンガ技術の実用化を図るため、地震被災のために新規建設される小学校敷地内にボンガによる図書館づくりに着手しました。2002年8月に第1棟を完成させ、2003年の3月には第2棟のボンガを建造しました。



2棟目のボンガ着手（2003年3月、バラチャディ村）



完成した日本庭園（2003年3月、アンキット）

2. 事前調査のための訪問

さて、今回の第3回目のプロジェクト実施に先立ち、2003年9月、事前打ち合わせのため、近藤雄二兼務研究員、おやさと研究所の野口茂氏と海外部の佐々木則夫氏が現地を訪問しました。

2003年の6～7月の雨季は過去にない雨量をもたらし、長年の干ばつからやっと抜け出したところでした。私たちが訪問した9月には青々とした緑や畑が続き、川にはあふれるばかりの水量が勢よく流れていました。しかし、この降雨はあちこちで洪水被害をもたらし、道路表面の損傷もおおきく、でこぼこ状態になっていました。私たちがつくった日本庭園も冠水し、修復の必要性がありました。

ジャムナガルを訪問する際には、地震震源地に近く、被害も大きかったブジを経由して、地震復興にかかわるNGO機関等を訪問して、第3回のプロジェクトの活動内容に反映する検討を行いました。

Institute of Rural Management (IRMA) は、非政府機関ですが、豊富な資金力をもとに農村部の生活や



2003年9月訪問時の天理大学チェックダム

人権向上のための調査研究や人材養成等の研修を行う機関です。PH.D Pandaさんを訪ね、インドにおける水問題や農村部の人間開発の課題について情報を得ました。農村部における人間開発プログラムは教育のみならず農業による収入確保のためのシステムづくりに成功している状況を確認することができました。Sadguru Water and Development Foundationは、水問題を専門とするNGOです。代表のDr.Rakesh Pandey氏に話を聞いたのち、施設とチェックダム現場に案内してもらいました。国際的な資金を独自に得ながら数多くのチェックダムをこの周辺につくりあげています。Foundation for Building Technology and Innovationは、震災後、ブジを中心に救援のための家屋を建築してきたNGO機関です。技術者のHunnar Shaala氏に話を聞きました。ここの活動はプロに近い建築家集団であり、多くの若い技術者をかかえており、事務所は活気に溢れていました。地震直後は、緊急避難的な家屋建築に力が注

がれていましたが、現在は恒久的な家屋の提供と同時に街づくり計画に活動の拠点が移っているとのことでした。

ブジにおいても地震被害の傷跡はほとんど見られませんでしたが、こうした情報収集のための訪問の後、ブジから陸路でジャムナガルに入りました。ジャムナガルの市内の主要道路からも、地震被災の跡形をみることはありません。市内のアーユルベーダ大学の構内には、地震直後、仮設教室としてつくられたボンガ数棟が当時の姿を残し、地震崩壊の校舎の一部もそのまま放置されていました。連れてくる学生達は、活動の意味を自覚するためにもこうした地震の痕跡をみせることは大切になるだろうと語り合い



アーユルベーダ大学構内に残る仮設校舎

ながら市内を一巡しました。その後、JJSSと打ち合わせ、私たちの3回目にあたるプロジェクトの活動内容を決めました。2002年から着手しているパラチャディ小学校の敷地内にすでに完成した2つボンガを中心に、3つ目のボンガを建設しそのボンガを連結させる形状の屋根をつくり、子供達の図書館とそのコミュニティ広場を完成させることを目標に掲げました。

3. 第3回プロジェクト活動の実際

このような経過を踏まえ、2004年2月21日からの第3回「国際参加」プロジェクト隊を結成し、現地に出発しました。今回も技術サポートのために3人の技術者の協力を得ました。

今回は、寄贈する衣料品を含め、段ボールは35箱。これまでかかわった施設と完成後の図書館に桜と竹の植樹をするため、桜は、ピンクの花を咲かす「ソメイヨシノ」と赤の花を咲かす「ミヤビ」を計7本。竹は、「モウソウダケ」「マダケ」を計6本持参しました。

第3回目にあたる活動を天理大学の出発から順を追って紹介します。

2月21日

大学研究棟前に午前7時に集合、全員で神殿に向かい参拝後、関西国際空港に向かう。関西国際空港より、タイ国際航空を利用して、バンコク経由でムンバイに向かう。午後10時45分ムンバイ空港に到着。入国の際に、係員が35箱の段ボールと竹や桜の苗木に対し、さまざまな質問をしてくるが、段ボールにヒンドゥ語で「インド西部大地震復興活動、天理大学活動隊」(資料編参照)の表示をしていたこともあり、学生達による地震復興活動である旨の説明をすると、特段の審査もなくスムーズに入国できた。

空港にはアフガニスタンを経由して、数日前にインドに受け入れ準備のため到着した井上センター長が出迎えてくれ、チャーターしたバスで空港近くのホテルに向かう。

2月22日

6時45分に朝食を済ませ、7時15分にはホテルをチェックアウト、7時30分にムンバイ国内線専用空港に到着する。第2回の前回は、ムンバイ到着後、空港ロビーで1晩を過ごしジャムナガルに移動したため、早々に不調者がでたが、それに比べると、早朝の起床でもあってもベッドで身体を休められただけ疲れ方が違う。

10時20分発、インディアンエアラインでジャムナガルに向け出発、11時10分にジャムナガルに到着

する。本格的な夏の到来前であったこともあり、機内からは、赤茶けた大地のなかに緑や水をたたえた「ため池」等も散見できた。空港着、持参した温度計の針は、気温、摂氏32度、湿度34%、暑い風があると涼しく、日陰は気持ちが良い。

空港でJJSS代表者のヒラベン・タンナさんらの出迎えをうける。彼女は、ジャクバイ・タンナ氏婦人である。第1回目に我々を迎えてくれたジャクバイ・タンナ氏は、2002年7月に死去されましたが、彼の意志を継いでNGO活動とともに私たちの受け入れに全面的な協力をしてきている。顔見知りになったJJSSスタッフの技師、プロビンシン氏の顔を見つけ、再会を喜びつつ、ホテルに向かう。今回滞するアラムホテルは、活動場所により近い、市内中心部に位置している。

ホテルで歓迎の言葉をもらい、学生達はひと休み。技術者の河口氏らは、早速、現場の測量に出かける。

2月23日～3月2日

この日から、本格的な活動。3台のチャーターしたジープで片道約40分のバラチャディ村往復の毎日が始まる。

街の中心部より、バラチャディ村までは、あふれるばかりの客を乗せたりキ車を追い抜き、数キロ先の井戸に水をくむために歩く女性達を追い抜きながら、また、路を占領する牛や犬たちに警笛を鳴らしながらひたすら走る。村に近づくとコットンや穀物畑が道路の両脇に広がる。この途中でも地震被害の後をみることはほとんど無い。

バラチャディ村に入ると、子供も大人も笑顔で私たちを迎えてくれる。小学校の敷地には、私たちがすでにつくった2棟の白いボンガがまっ青な青空を背景に目立つ。早速3棟目のボンガに着手する。

昨年と異なり、村の中心部の貯水井戸への給水車の往来がないことに気づいた。2003年の数年ぶりのモンスーンにより、枯れた井戸に水が戻っていた。天理大学チェックダムの効果によって、付近の井戸や農地に用水確保が可能となっていることを確認できた。

さらに、昨年までは、小学校敷地内の貯水池を工事用水として使っていたが、この1年間の間に小学校敷地内に井戸が掘られていた。豊富な飲料水が村人に供給されていたことに驚かされた。また、この井戸は天理教の某分教会が海外部国際たすけあいネットに依頼して現地NGOに寄贈した井戸でもあった。



水を運ぶバラチャディ村の少女



バラチャディ村の綿花の収穫



バラチャディ小学校敷地の井戸

24日は、夕刻、NGO代表、ヒラベン・タンナさんの知人子息の結婚式に招かれることになった。女子学生は、この機会にサリーを着て参加することをヒラベンさんから勧められ、一同サリー姿で参加することになった。この地方の有力者子息の結婚式であったこともあり、5,000人もの招待客で会場は一大フェスティバルのような盛り上がりと一緒に感激をして夜の更けるまで楽しんだ。



バラチャディ小学校とボンガ



3つ目のボンガが完成

28日に3棟目のボンガが完成した。今回も女性の働きが目立つ。3棟のボンガの中心部に芯柱を立て、屋根づくりに着手する。この間、付近の子供達はもちろん、普段は私たちの前に顔を出したがない母親達、この地方の行政官、たまたま観光でここに滞在しているアメリカ人女性が訪問するなど、いろいろな方との交流が行われた。



3つのボンガ中心部に芯柱をたてる



屋根の骨組みが完成したボンガ図書館

28日の夕刻には、パートナーのJJSS役員会と記者会見がヴィシャルホテルで開催された。井上センター長が記者会見で活動を報告した後、センター長からは天理から持参した竹の根が、近藤隊長からは桜の苗がJJSSに贈呈された。学生達からは、日本企業から寄贈された女性用衣料が参加者とJJSSに手渡された。その後、私たちの歓迎会が催された。この役員会にはテレビ、新聞等のマスコミも取材にきた。私たちは、この歓迎会で四季の歌を披露した。



JJSS役員会で竹を贈呈する井上センター長

29日には、バラチャディ村にテレビ取材、新聞記者が訪れ、私たちの活動取材、インタビュー等が行われた。役員会での記者会見の様相から、ボンガ

づくりの一連の活動は、翌日の2日に現地TVのニュースで放映されるとともに現地新聞にも記事が掲載された。この主な画面を資料として掲載している(添付 カラーページ参照)。

3月1日には竹で組んだ屋根部分も完成した。竹の一部は3年前に第1回隊がバラチャディ村のアンキットで建設したボンガのそばに植樹し育ったものが使われた。この日の夜は、アーユルベータ医科大学の2名の日本人留学生を私たちのホテルに招いてヨガの実演と指導やアーユルベータのパンチャカルマ療法の実演を通して交流会を催した。



天理大学の活動を掲載、報道する現地新聞

3月2日

現地出発前日の最終日である。バラチャディ小学校に図書館施設を贈呈するセレモニーが盛大に行われた。完成したボンガづくりの図書館は、早朝から現地のスタッフにより、ブーゲンビリアの花で飾り付けられ、白のボンガが赤い花で浮かび上がった。



小学校長に施設一式を贈呈する井上センター長

図書館正面の左右には、天理から持参した桜の苗木が植樹され、ボンガ表面には天理大学寄贈の文字が書かれた記念碑を埋め込んだ。井上昭夫センター長から、バラチャディ小学校のラメッシュバイ・ナクム校長に施設一式が寄贈され、その後、学生達は各自が日本から持参した絵本やおもちゃを子供達に贈呈した。

児童達はヒンドゥ教の祈りの歌をささげ、その後、大人達がインドの伝統的な楽器を奏でるリズムにあわせて、芯柱をかこんで児童達が踊りはじめた。自然に学生達もその輪にくわわり、子供達との分かれがたい交流会が続いた。

その夜は、JJSS役員宅に招待され、ジャムナガル最後の夜を過ごした。



芯柱を中心に踊る少女達



ボンガ図書館入り口の桜と天理大学のプレート

3月3日

ジャムナガル11時20分発の航空機でムンバイに移動し、日本への帰途についた。ムンバイでは、1泊し、翌日午後11時40分発のタイ国際航空を利用して、往路と同様、バンコク経由で関西国際空港に向かった。

また、ムンバイ、サンタクルーズに滞在する渡辺道雄氏にインドでの活動を改めて聞くとともに、2001年以降の国際参加プロジェクトへの惜しみない協力に感謝して、インドを後にした。



ボンベイ布教所で話を聞く参加学生

4. 「国際参加」プロジェクトと「国際協力論（実習を含む）」の開講

学生達にとっては、入学式や卒業式にしか目にしない「建学の精神」。宗教系私立大学として21世紀、個性を発揮した教育プログラムによる社会的な人材養成が求められています。「他者への献身」の実践プログラムとして位置づけてきた本プロジェクトは、実践の場のみならず、他者への思いやりを国際性と宗教性の涵養に裏付けられた理論学習としても求められています。

2003年度から、国際文化学部専門科目ではあるが、全学部に開放する授業科目「国際協力論（実習を含む）」を開講しました。井上センター長は、国際参加プロジェクト活動を支える理論科目として本科目を意図し、野口茂氏（おやさと研究所）と近藤雄二（センター兼務研究員）に本授業の立ち上げを指示しました。初年度は、新カリキュラムのため、1年次生しか履修できなかったが、多くの学生に国際協力の「こころ」を教育的な活動と国際的なNGO活動の紹介をとおして、自らがこうした活動に関わりたいと思う力を獲得させる内容として構成しました。

とくに、国際性と宗教性巢の涵養のための教育プログラムの一環としての授業科目であることを意識して、天理教の各部門、各教会が国内外で展開しているさまざまな奉仕、医療、文化交流を含むNGO活動に触れて学ぶことを重要な要素として位置づけました。幸いにして、教庁海外部に設置されている国際たすけあいネットとの連携と協力を得ることが出来、教学協働のこころや建学の精神（「他者への献身」）にもとづいた実践課題を履修者みずからがつかむ契機をつくることを可能にしました。

外部講師には、天理教海外部国際たすけあいネットの事務局の田中善教氏と海外部翻訳課の佐々木則夫氏、そして国際参加プロジェクトの第1回参加者で卒業後、神戸のNGO機関、CODE事務局に勤務する斉藤容子さんをお迎えして有益な話題を提供していただきました。実習は、第1回「国際参加」プロジェクト参加者であった卒業生の斉藤容子さんが勤務する神戸のNGO機関に訪問し、被災地NGO協働センター代表の村井雅清氏にお話をうかがいました。授業とNGO訪問に参加した学生達のレポートからは、学生達が学び獲得した心と国際協力への関心の高まりが読みとれます。レポートとともにシラバスを資料として掲載いたします（資料編のシラバスとレポート参照）。

5. まとめにかえて

他人への思いやりを実践するためには、私たちが背中を「ちょっと」おすことで、その思いは行動につながります。「国際参加」プロジェクトは、学生達に気持ちを行動にあらわす場と機会を提供してきました。きっかけづくりの支援をしているのみで、つぎの一步は、学生自らが考え、行動に移してもら

いたいという強い期待をもっています。

世界のあちこちで起こっている災害や事故、紛争や戦禍で心身ともに傷つくのは、子供や女性に集中することはよく知られている事実です。つき動かされる感傷だけでなく、その傷つく人々の背景と構造を知って行動する人材を養成したいと思っています。実践プログラムと一体化するかたちで開講した「国際協力論（実習を含む）」は、「国際参加」プロジェクトの活動を単位認定する科目でもありました。2005年度からは、この科目とは別に「国際参加」プロジェクトの実践活動の単位認定を目的とした実習科目「国際協力実習」の開講準備も進めています。

建学の精神を基盤とした「国際参加」プロジェクトの理論と実践の試みは、この3年間でかたちのあるものになりつつあるとの自信を深めています。新入学生のなかには、大学案内に紹介している「国際参加」プロジェクトが大学受験の決め手になったとレポートに記載したものもありました。本プロジェクト活動は、教学協働で行ってきたために意義がより一層明確になっています。地域文化研究センターは、学部教員の枠を超えたかたちで企画と実施の体制を整えています。今夏からは、場所を変えて「国際参加」プロジェクトが実施されますが、インドでの活動と同様に成果をあげるために力を注ぎます。

最後に第1回、2回隊の報告書を入手し、それを読んだ学外の大学教員からは、参加した学生のレポートを読んでプロジェクトの教育効果について高く評価してくれ、感動したとの報告を受けていることを記録しておきたいと思います。

第3回プロジェクト引率メンバー



造園家の木内さん



井上センター長と近藤隊長



建築家の江崎さんと教庁営繕部の河口さん

参加学生レポート

学生の学年は、参加時の平成15年度(2003)の年次である。

1. 第3回「国際参加」プロジェクト参加者レポート
2. 「国際協力論（実習を含む）」履修者の授業レポート

1. 第3回「国際参加」プロジェクト参加者レポート

恵まれて生きていることを自覚した、インド・プロジェクト

苑田昌嗣（ドイツ学科、4年次生）

初めて訪れたインドは、私に数え切れない驚きを与えてくれた。見るもののほとんどが、初めての経験であり、体験であった。

今回の2週間に渡るプロジェクトに参加した動機は、まず、インダス文明の歴史を持ち、10億とも言われる人口を抱える後進国でありながら、世界のIT社会化を技術者の面で支える優秀な人材を（結果的に）提供しているインドに、強い興味があったことだ。多くの文化が混在する社会、語学力に長けていると言われるインド人と直接交流を持ちたいことも、大きな理由であった。私にとっては、今までであり得なかった、団体行動への自らの参加（前は文化実習で、その前は恐らく高校の修学旅行だったように記憶している…）をすることによって、新たな経験を積もうと思った事もあった。

インド・ムンバイ（ボンベイ）の空港に夜降り立ち、ホテルへの道沿いに見える景色は光が少なかった為、私は、貧しさをあまり感じなかった。それは、都市でも無駄な光（照明）の少ないドイツの夜を経験していた為、逆に、沿線でも暗い夜を当然の事として受け止めていたのかもしれない。しかし、明朝ジャムナガルに向かう為、再び空港に向かうバスから見える景色は、ドイツ（場所によるが…）とはかけ離れていた。崩れかかるビルや整備されていない道路、家を持たない数多くの人々…など、インド大都市の一面を目の当たりにしたのだ（きれいに整備されている地域もある）。それが、初めてインドを直に感じた瞬間だったように覚えている。

ジャムナガルでは、後進国であるに違いないと確信していた大きな貧富の差を見る事が出来た。金持ちが手伝い人を数名抱え、教育もろくに受けられない子供達が多くいる。なかには、稀にほぼ完璧な英語を話す子がいる。訛無く話すその英語は、優れた教育を受けた証で、学校では英語で話し、家で現地語を話し、更に公用語であるヒンディ語も話すと聞いた。少数の金持ちと本当に多くの貧しい人々が、共に（同じ国で）生きているのだ。先進国の貧富の差とは、往々にしてかけ離れている。

インドには、カースト制度がまだ、予想していたより色濃く残っていた。我々は、幸運にも、ジャムナガルで開かれた野外の盛大な（金持ち同士の）結婚式に出席する事が出来た。そこで偶然新婦の従兄弟と知り合った私は、5,000人からの参列者があること、その結婚式がその地方でこれまでに無く大きなものである事を聞いた。私は、そこで様々な身分の人々を見てみると錯覚していたが、後で身分の違いで参列出来ない人がいると聞いて驚いた。

身分の差を感じた大きな出来事は、他にもあった。我々は、目標であった小学校横のボンガ（図書館）造りを技術、材料収集面で強力に支え続けてくれた、地元大工の棟梁に当たる人と、時間を共にする事が多かった。その彼は、我々が招待された地元の名士の夕食会などでは必ず末席に座っていた。ある日私は、我々がある家で家人に指定され玄関（靴を脱いでいた場所の意）として使っていた場所より手前

で、彼が靴を脱いでいるのを見て驚いた。更にその日、我々と共にボンガを積み上げていた青年の一人も、前出の棟梁と一緒にその家の前まで来ていたが、一向に入って来ない。会いたかった私は、表に出、靴の“事件”も気に掛かっていたので、「家に入る事は出来ないのか？」と尋ねると、彼は本当に何とも言えない顔をして首を大きく横に振った。恐らく、本当に入る事が禁じられているのではなく、身分差から来る差別を拒否しているように、感じられた。この時私は、(今だ残る階級制度に対して)強いやるせなさや歯痒さ、怒りを覚えた。

ジャムナガルでは多くの(物質的に)貧しい子供たちに会ったが、彼らの目は、まさに輝いていた。我々異国の人間にも興味しんしんだ。屈託の無い笑顔で近付き(裸足の子もいる)、「名前は？」と知っている限りの英語で話しかけてくる…。その証拠に「ハローマサ！名前は？」と何度も聞かれた。作業を共にした前出の彼は、パワーは元より何本もの竹を紐で結ぶ作業で私を唸らせた。まず紐を切る時、彼は石で切った。鋏が無かったからではない。そもそも探そうとしないのだ。結ぶ時も、何本も長い竹を束ねて運び難くなった一束を如何に持ち易くするかを考えて、とても素早くきっちりがっちり、結んでいくのだ。何が大事なのか、何が人を豊かにするのか、本当に考えさせられる。

今、私は、強い自戒の念を込めて、我々が如何に恵まれて生きているかを考えている。不満を言う事は、いつも簡単である。満足、許容する重要性、もし不足・不満があるなら自らがどのようにして現状を変えるか、現状に近づくかの自発性が、生きる為に不可欠である事を改めて思う。今回の2週間が全て用意してもらった旅であることは、明白だ。我々のした事は、確かにボランティアに違いないだろう。しかし、優秀な技術者に囲まれて、旅程同様、敷いてもらったレールの上を走ったに過ぎない。一体どれだけ本当のインドの姿を知れたか判らないが、今回の2週間を自分のこれからに存分に活かしていこうと思っている。

私は、小学校に幾つかのテニスボールを寄付した。出発前にそのプレゼントを選んだときから楽しみだった。彼らは、このボールを使い我々が思いもかけない遊びを思い付くのだろうと思っている。いつか、その遊びを彼らに教えてもらう日が来る事を、願っている。

インドの印象

宮 島 綾 子 (ドイツ学科、4年次生)

私は、記録係りとして、このプロジェクトに参加しました。

インドでの一番印象に残った事は、なんと言っても、インドの空港に着いたときです。井上先生が出迎えに来られていて、参加者が井上先生を見つけた時の表情です。先生が来られていることを知らないときは、インドだね～と言った感じで、少し不安が入り混じった表情だったのが、井上先生を見つけた時、皆の表情が一瞬にして、緩み安心の表情に変わりました。

後は、私はほとんど撮影をしていたのですが、レンズを通して毎日メンバーの顔を見ていて思ったのが、日が経つにつれて、引き締まっていくのが分かりました。後、夕方になるにつれて、男の子達の日焼け具合を観察するのも面白かったです。

ジャムナガルでは、メンバーが凄い早いスピードで成長していき、作業以外でも夜色々な話をして、参加メンバーの意外な一面を知ることができたり、私にとって非常に濃い2週間を送ることができました。

作業外では、市内散策の時に物乞いの写真や、インドの人の生活風景を撮ったことが楽しかったです。しかし、いかにも撮影していると言うことが分かったら、お金を求められてしまうので、ファインダーを

覗かずに、感覚だけで構図をとり撮影していました。ファインダーを覗かずに撮影するのは結構楽しかったです。

インドでの結婚式も貴重な体験ができて嬉しかったです。サリーを着るのは初体験だったのでなんか恥ずかしかったです。でも、不思議なものでサリーを着ると自分がインド人になった気分になってしまっていました（笑）。

小学校での作業中親切に毎日トイレを貸してくれた家族の人たちは、毎朝借りに来るのを楽しみに待っていてくれたのも嬉しかったのですが、作業に戻ろうとすると、ナッツを持ってきてくれたり、写真を見せてくれたり家の中に引っ張りこんでくれたりして、作業になかなか戻らせてくれなかったのには、少し苦戦しました。

インドの人たちは、もっと内向的なのかと思っていましたが、打ち解けるととても親切で、体調が悪そうな顔をしていると、心配してくれたり、親のような優しさを沢山くれました。20人も人間が共に作業を行うのは、色々トラブルもあり大変ではありましたが、それはそれで、自分自身成長する糧となりました。この、プロジェクトに参加できて良かったです。

三度目の参加、自問自答の答え

渡 辺 豪（ドイツ学科、3年次生）

「土囊で家を造る」 この怪しく、原始的な考えに興味をもったのは、一年生時に履修していた生物の講義がきっかけだった。人一倍、努力や頑張ることが嫌いな自分だったが、「なんか面白そうやし、人助けにもなるみたいやから、いっちょやったるか!」、たいした志もなく初回のプロジェクトに参加し、どういうわけか既に三回目のインドを終えている。今回のプロジェクトを迎えるにあたり、自問自答を繰り返した。何故、このプロジェクトに参加するのか？ ボンガを造ることへのやりがいがあるか？ 現地の人役に立てるからか？ それとも、ただインドという国に魅力を感じているからか？

そんなことを考えながら、ついに当日を迎え、主な活動場所のあの村に到着した。村の住民との再会は懐かしく嬉しくもあり、恥ずかしくもあった。彼らは常に陽気で、気さく。時折覚えてた日本語で嬉しそうに話しかけてくる。常に作業を手伝ってくれたのは三人だったが、まわりで見物している人々も何かしらの手伝いをしてくれる。現在の日本ではなかなかないことだろう。連日、炎天下での作業に疲労困憊していたが、全員が慣れない環境のなかで作業をすすめられたのは彼らの不思議な雰囲気のおかげかもしれない。

今回のボンガ作業は過去のとは少し異なり、以前につくった二基のボンガとの統一性を持たせ、一つの建造物とすることになった。1年度目に造ったものはモデルハウスであり、倉庫に使われるとのことだったが、2年目から本格的な利用を想定した建築であった。それだけに、今回の作業には特別な気持ちがあった。先にも書いたように、炎天下での作業は決して楽ではなく、自己との戦いでもあった。決して好んでやりたいものではなかった。フラストレーションを感じ、集中を欠きながら作業をすることも多々あったが、技術者として同行してくれた河口さん、木内さん、建築家の江崎さんは技術的なことだけでなく精神面でも本当によくフォローしてくれた。この方々には非常に感謝している。そして全ての作業日程が終了し、遂に完成したボンガを目の当たりにした。達成感から起こる喜びや、大きなトラブルもなく無事に完成したことへの安堵感でいっぱいだったが、村人との別れは本当に辛かった。みんなで築いた一つの小さな図書館を背景に、手を振る村人たち。段々と小さくなるその光景を車から眺め

ていた。あの時の気持ちは死ぬまで忘れない。

何故、このプロジェクトに参加したのか。出発前の自問の答えは考えたこと全てが正解であり、的外れでもある。ただ、今はっきりと自分の中でわかっていることがある。あの村には、あの国にはまだまだやれること、やり残していることがある。国際参加プロジェクトとしてのインドでの活動はこれで終わりかもしれないが、そのすべき事、やり残したことが判った時、「頑張り、努力」嫌いの自分がたった一人でもそれを為し遂げにあの地へ向かっているかもしれない。

なぜ2回目のインドに参加したか

本 田 光 美 (ドイツ学科、3年次生)

2回目の参加の『国際参加』プロジェクト。1回目とは違った気持ちがあった。

3年前の初回時のインドは、参加の理由が「ボランティアができるから」と、単純だった。準備期間も短く、1回生の夏だったので「年上に任せておけばいいだろう」と甘い考えもあり、自分から動くことはなかった。また、初めての海外ということで何かを考える余裕が無かった。2週間がアツと言う間に過ぎていたのを思い出す。本当に短く現地で初めて土をいじり作業をしたので、要領も分からず手探り状態でボンガとチェックダム作りに挑戦していた。帰るころになると現地の人達の協力によってチェックダムは完成していたが、ボンガは完成を見ることができなく悔しい思いをした。1週間で過ぎた頃から下痢になり始めたが、日本の下痢とは違い、痛くなく皆で下痢の調子を確認していたのを思い出す。

今回の参加に迷いは、無かった。今回こそボンガを完成させて帰りたい、という気持ちが強かったからだ。また、1回目で作ったボンガの完成を見て頭に焼き付けたかったのもある。インドについてのインタビューを受けたときも『完成させたい!!』と何回も語ったぐらいだ。しかし、ボンガに対する思いは強かったが、学生15人の集団行動については甘くみて、コミュニケーションをとろうとは当初思わなかった。私の中には、3年前と同じ甘えがあり班長に頼りきりだった。途中から班長になった時、この甘さに気づいた。今から私には、何ができるのかよく考え2月21日の出発にそなえる事にした。

インド到着。懐かしい風景が、目の前にあった。牛が歩く道路、夜なのに明るく人が多い町、ほとんどが変わっていなかった。グジャラートに入ると、まず空港に立っている人を探した。前と同じくライフルを持っていたので緊張した。パキスタンに近いので、まだまだ必要不可欠だが、町を見ていると本当に緊迫状態なのか疑ってしまう。町に入ると少し雰囲気が、変わっていた。道が整備されていて、映画館が建っていた。それ以外で変わったことは、なかった。相変わらずバラチャディまでの道は、ガタガタで揺れが懐かしかった。この揺れがあるから、車の移動が楽しいぐらいである。普段は酔う子ども、この揺れは不思議と酔わない人もいた。逆に作業前の車移動で、体力を消耗している子もいた。

作業初日、暑さのせいかな理のペースで作業ができず、またペース配分が上手くできなかったため、終わりに近づくにつれ皆の疲れが見えてきていた。思わずペースを落として下さいと頼んでしまい迷惑をかけてしまった。今なら、日本を出たのが、冬だったため体が、暑さに慣れるので精一杯だったんだろうと思える。2日、3日と、作業するなかで徐々にペースを取り戻せたようで、作業がしやすくなっていた。また、現地の人とのふれあいが、心を和ませた。1回目では、現地の人とのふれあいが薄かったため嬉しい気分だった。歩く度に好奇心旺盛な目で子ども達がよってくる。まるで有名人になった気分だった。日本で外人を見つけてもよって行くことは無い。話してみたいとは思うのだが、怖くてよれない自分がある。しかし、こんなにも嬉しいのなら試してみようと、考えていた。行動力の無い私にと

っては、大きな冒険になりそうだ。ボンガ自体は、約1週間でできたのを見て、天理大学内に作っているボンガのペースの遅さを思い知った。贈呈式では、子ども達が歌をうたってくれ心がいっぱいだった。今回でインド行きは、最後と聞いていただけに切ない気分だった。また、バラチャディ村を訪れたい。

インドが初海外の人も多く、緊張している人もいた。2～3日して体調を崩すものが数人でできた。食が合わなかったのと、紫外線の強さ、団体行動によるストレス、インドに慣れ緊張感がほぐれてきたので体調を崩してしまったのだろう。しかし、皆、自分なりに体調管理をしていたので、作業中に寝込む人はいなかった。帰る3日ぐらい前に寝込む人が出たときは、自分はどうする事もできず祈るぐらいしかできなかった。前に同室の子が寝込んだ時もオロオロしていた。その時、おさづけを始めて見たのだが、おさづけは、何かをしてあげたい気持ちが反映されているなど思った。

今回のインド行きで私は、多くのことを考えた。大変ではあったが楽しい2週間だった。漠然とボランティアが、したいと思っていた私を押ししてくれた『国際参加』プロジェクト。2回もインドに行くとは、思っていなかったがよい経験になった。今回でインド行きは最後だが、今後もインドでボンガが作れるようにしたい。

参加して得たもの

西山拓司 (インドネシア学科、3年次生)

ボランティアとは？ そう思いながら参加したインド「国際参加」プロジェクト。結果としては、インドのバラチャディの子供たちに図書館をつくってあげると言うよりも、自分自身が幸せになれるチャンスをつくったという気持ちがのこりました。

はじめて足を踏み込むインド、初めて参加するボランティア。躍る心と、行く先を不安に思う心とが葛藤するなかで、周りの人、物に励まされてスケジュールをこなしました。この計画は、無事インドのバラチャディにボンガで図書館を完成させたら成功であって、それ以上は己の中で何を考え、何を行い、何に繋げるか、なんだなぁと思いました。作業は楽ではなく、単なる肉体労働に過ぎません。しかし他では味わえない物を体験しました。それをどんな風にここで書き表したら良いのかわかりませんが、ボランティアに参加してみるとわかります。私の場合、人のために何かをしようと思っていたのに、図書館を作った自分の方が、より大きな感動を得ることが出来ました。私はこのインド国際参加プロジェクトに参加でき、本当によかったと思います。最後になりましたが、このプロジェクト達成のために関わってくださった皆さん、ありがとうございました。

インド西部地震被災地復興活動を終えて

西村俊祐 (宗教学科、3年次生)

第1回から自主的な渡航を含めて、私にとって4回にわたるインドでの「国際参加」プロジェクトが終わった。

インドでの活動が最後となる今回、第1回から継続して参加してきた私にとっては、地特別な意味を持つものとなった。

第一回目は、「10万で行けるなら」と安易な考えから参加。第二、三回は、バラチャディの人々に、「帰って来い」と言ってもらい、待っていてくれる人がいるとの思いと、不思議で捉えようのないイン

ドに魅せられて、もっとインドを知りたい、もっと不思議なことに出会いたいとの思いで参加した。

そして、インドでの「国際参加」プロジェクトを通して、学び、教えられ、自分を見つめ直して自分は、将来、「人のために尽くすことがしたい」と思った。しかし、それは漠然としたものだった。だからその、漠然としたものを形にしたいと思い、四回目のインドに行こうと決意した。

私は、インドに来る度に、この国は世界の縮図のように見える。それは、貧富の差の激しさを見るたびに思う。世界では、先進国に物やお金が集まり、食べ過ぎで病気になる人が多く、社会問題にまでなっている。それに引き換え、途上国では食べる物や薬がなく、助かる命さえ失われている。インドでも、大理石で出来た家に招待され、そこで豪華な食事を食べさせてもらったが、一歩外にでると、そこには、路上生活者や、物乞いがある。

このような体験をする度に、自分がどれだけ恵まれた環境で生活しているかがわかり、一日一日を、感謝して一生懸命生きようと思えるようになった。

また、グジャラート、パキスタンとの国境も近いためか、低空を戦闘機が飛行している。その光景を見ると、日本で平和ボケしている私には、戦争を身近に感じた。

そして、インドから陸続きで、アフガニスタンやイラクがあり、自分のいる場所から、近い国で今でも、人と人が憎み合い、殺し合いをして、苦しんでいることを肌で感じた。

今までは、テレビの中で起きている事で、海を隔てた遠い国の出来事が、私にも関係のある事だと考えられるようになった。

また、インドでバラチャディ村の人々と、10日間ほどではあったが、3回ボンガを完成させるという同じ目的で、一緒に汗を流す中で言葉は少ししか、通じないが友情が芽生えた。

毎回行く度に、私の名前を忘れずに覚えていてくれ、一緒に働いた、ムナ、イヌスは兄弟だと私に現地の言葉で言ってくれ、ムナの父は私を息子の様にかわいがってくれた。

最後の別れの時は、村の人々が集まってくれ、別れるのは淋しい、また戻って来いと泣きながら見送ってくれた。私も、淋しさと、ここまで言ってくれるバラチャリの人の心が嬉しくて、涙が止まらなかった。

言葉は通じなくとも、心は通じるのだと改めて思った。そして人間は、親である神のもとに、肌に色や、言葉は違っても本当の兄弟姉妹なんだと実感した。

今回三度目のボンガと、今回、建築した三基目のボンガに屋敷を付けて、一体にすることで図書館となり、バラチャディ村の子供たちの役に立つ物となったことに、一つのことを成し遂げた達成感と感動、そして私にも、人の役に立つことが出来たという自信ができた。

私は、第三回目のプロジェクトを終えて、一つの事をやり遂げた事で、本当に大きな自信と自分が3年間続けてきたことにプライドが出来た。

今まで、人にために尽くすことがしたいと思っていたが、本当に漠然としたものでしかなく、また何から始めればいいのかわからなかったし、自信もなかった。

しかし今は、人のために尽くすことがしたいという、漠然としたものには変わりがないけれど、でも一つの物を完成させ、一つの事をやり遂げた事で、始めなければ、何も始まらないと思える様になった。

あと、一年の大学生活で、なにが出来るか分からないが、小さなことでも、一歩一歩前に進んで、人のために尽くすことがしたいと言う夢に向かって進んで行きたいと思う。

最後に、このプロジェクトを企画し、色々な経験をさせて下さった井上先生、私たちに陰で支えてくださった、近藤先生、佐々木先生、共に作業して、色々なアドバイスをくれ木内さん、江崎さん、河口

さん、今まで、一度も反対せず、快くこのプロジェクトに参加させてくれた両親に、心から感謝しています。

そして、今回の参加学生15人と、一緒にインドに行って楽しく過ごせて本当によかった。

何ができるか、自信をつけさせてくれたプロジェクト

松尾 晃 宏 (宗教学科、3年次生)

将来、海外布教にたずさわる道につこうと決めたのが、去年(2003年)の9月だった。海外布教を志しているが、海外布教とは何なのか、いまだ海外にでる縁がなかった自分には具体像がつかめないでいた。そこで実際に海外に出て、何か活動して自分なりに海外布教をつかもうと思い立ち、探して見つけたのがこの「国際参加」プロジェクトであった。「国際参加」プロジェクトの精神は「他者への献身(=親神への献身)」。これは間違いなく自分の求めているものであると思い、即決した。いま振り返って、この時の決断は正しかったと思う。実際に、「国際参加」プロジェクトに参加して多くのことを学んだ。そして、ものごとを捉える視点が変わった。

「上空から見たインド」

飛行機から見下ろしたインドは信じられない光景であった。ひどく砂っぽくて荒地とも畑とも見分けのつかない大地が広がっていた。自分の目に映っているのが現実とは思えず、この世の果てだと思った。しかし、地上は違った。インド人は原色が好きなのか町並みはカラフルで、車・オート三輪車・トラックはクラクションを排気ガスと同じくらい垂れ流し、道をわがもの顔で歩く牛も、らくだも、犬も羊も豚も人間の真横で共存する、賑やかで生命力あふれる所であった。

「からだ意識」

インド滞在中は、自分の体調に特に気づかった。一人が体調を崩すと全体に何らかの影響がでるし、短期間のインドのひとコマを部屋で過ごすはめになる。日本で生活している時では、ありえないくらいに自分のからだに注意したが、それでもインドの洗礼を受けることとなった。しかし、いざ下痢になってみると思っていたほど苦しくなかったし、自分の精神力を試す良い機会となった。

現地で全く食べた事のないものを食べ続けた上から、食べることの大切さが身にしみてわかった。インド食はカロリーが高いのか低いのか、わからないが満腹まで食べてもどこか満足感がなかった。心理学的に幼児体験云々ということは、頭でわかっているけど日本食が恋しかった。

また、食とともに大切だと痛感したのが「水」であった。飲み水は当然買って飲むミネラルウォーター。水道水は危険で飲むことはおろか、歯磨き後のうがいやシャワーで「水」を口から奥に入れないように注意した。天理大学一行はジャムナガルのホテルにいるから水道水をひねると「水」がいつも出てくるものの、ムンバイなどは時間指定。作業現場付近のバラチャディ村は主に井戸水を使っているようであった。「水問題」は日本にいる時から知ってはいたものの、それは疎遠でどこか希薄なものであったが、インドで差し迫った深刻な「水問題」を体解した。

「他宗教との出会い」

死という感覚が身近で、死に対する意識が高いためかインド人は信仰深い。自分の命をかけて聖地へ向かう者。宗教に対するその真剣な姿勢は自分の心に突き刺さった。インドとの出会いは他宗教との出会いでもあった。

「祈り」

期間中はおつとめを毎日させて頂いた。おつとめをつとめさせて頂くことにより、自分の心は安らぎ、希薄になりかけていた自分の意志を再度確認する事ができ、また親神様の篤いご守護を感じる事ができた。祈りの最中、心は聖地ぢばにあった。

「ハリジャン」

事前から知ってはいたものの、衝撃が走った。他人にさし出している手と、自分にさし出している手は明らかに違い、それはリアルであった。何より心苦しかったのがバラチャディ村の学校にいる子ども達と同じくらいの子どもが物乞いに来たことであった。カースト・ヴァイシャくらい的位置にある子どもに対して図書館を造っている人間がアウトカーストの子どもに何もしてあげることのできない不甲斐なさ。ハリジャンにお金をあげないことが正か誤か、お金をあげることが正か誤かわからない自分は、ハリジャンにとっての良し悪しを考慮にいれず、ただ自分がハリジャンにお金をあげたいからあげるのだ、ということで問題を解消した。

「作業について」

作業は、現地NGOの人とも連携し皆が一つになり、楽しさの中に真剣さを持って良いムードで出来たと思う。図書館が完成した時は非常に嬉しく、ものづくりの喜びを味わうことができた。期間中で最も感動したのは、図書館完成セレモニーでのこと。我々が日本から持っていった本を子ども達が小さな手にとり、その本を開けてくれた時のことである。溢れるような満足感が体中にしみた。今はまだ小さいこの子ども達が新しい時代を築くのである。

「日本に帰ってきて思う」

今、思う事は「国際参加」プロジェクトと一緒に参加して共に汗を流して笑いあった仲間達、期間中に我々が着ているTシャツの背中で輝き続けた天理大学、そして自分自身をも強く誇れるということである。根拠はないが、「何かできそう」という気持ちが自分の胸の中から湧いてくる。インドの強烈な貧困の中で今日も生き抜くハリジャン。これから自分にできることを模索しながら、一つ一つコツコツと丁寧に土囊（知恵・能力）を積んでいきたいと思う。

井上先生、近藤先生、またサポートして下さった先生・技術者の方々、本当にありがとうございました。

自分自身にとってのインド、そしてプロジェクト

中山 真 哉 (宗教学科、3年次生)

このインドプロジェクトに参加したきっかけは、友達から誘われたことでした。はじめは、インドになんて行くがらじゃないと思い、人見知りちな自分が飛び込んでいく勇氣もありませんでした。しかし、この話、自分が少し動いてみたらあつというまに進み、参加メンバーとも話しができるようになり、いままでにはない世界が開いていることに楽しさを覚えました。

人にばかり頼っていたがはじめて自分自身で動いている実感をもつことができました。

インドに行く日が近づくにつれ、親は心配をしましたが、私は小学校の遠足のようなきどきやわくわくでした。

当日、飛行機が初めての私は、誰よりもはしゃぎ、少し浮いていました。飛行機に実際に乗り込むときまで、なにもが新鮮で自分でも今思うと恥ずかしく思います。飛行機の中は、自分が思っていたより広い感じがして、はじめてなのに窓側席。興奮状態がおさまらないまま動き出した飛行機は、いよいよ

離陸の位置につきスピードが加速して浮いたと同時に体に圧力がかかって少し気分が悪くなりましたが、空から見る景色は緑が多くてまだ自然が残ってるのだとあらためて思いました。飛行機の中ではみんな楽しそうにしてこれから二週間をともに過ごすみんなと仲良く楽しいものにするぞとひとり意気込んでいました。タイのバンコクに到着するとともに、日本とは違うにおいがしてすべてが珍しくテンションがあがりっぱなしでした。夕方のボンベイ行きの飛行機の中はインド人ばかりで日本からの僕たちを物珍しげにみる人たちばかりで、いよいよ違う国に行くのだなという実感がわいてきました。2回目の飛行機は、疲れたの一言でした。1回目の感動はどこにいったのやられて感じで、ボンベイに着いたときにはみんな疲れた表情をみせていました。みんなで荷物をカートに乗せ外に出た瞬間、空気が違った。排気ガスが充満し、人が路上で寝ていたり、やせこけた犬が何匹も歩きまわり、仕事をしているのかなにをしているのかわからない人たちが飛行場の前には集まっており、「すごい」の一言だった。この一言には、いろんなすごいがいっぱいつまっていた。バスに乗り込むまで気を張ってた私はバスに乗った瞬間から安心していっばいになり疲れがどっとでてしまった。バスから見えた外の景色はいままでにみたことがないくらい、インドの現状が垣間見えた気がしました。クラクションの音がなりっぱなし、信号があってもそれが信号かどうかわからないくらいの車の多さ、街の状態は嘘でもきれいな国ですとは言いがたいくらいに汚れた街並み。これがインドの主要都市。なんて国なんだ。衝撃の数々をうけて、ホテルにつきベッドに横たわった瞬間、日本ってどれだけ平和か自分がどれだけ世界をしらなさすぎたかということをしみじみと感じたままその一日目は過ぎていきました。二日目は国内線でジャムナガルに飛びました。ジャムナガルに降りたときの感想は暑い、とにかく暑い。小さい空港には地元の人がたくさんいて、私にはそこにいる人たち全員が同じ顔に見えてしまって、先生たちに言われるがままに荷物を運び車に乗り込み空港をあとにしました。ジャムナガルの最初のイメージは、小規模な都市でボンベイで受けた衝撃よりもゆったりしたところにきたなという感じだった。普通に牛やラクダが道のど真ん中で寝てたり、車は牛に遠慮して走っているし、でも歩行者とか自転車とかにはおかまいなしに、クラクションを鳴らしてどかすし、聞いてみれば人をはねても重大なことではないらしく、牛をひいたほうが重大なんだというのを聞き、また衝撃を受けてしまった。ホテルは日曜とかさなり庭でお祭りなのか、結婚の披露宴なのかわからないが人があふれていました。

その日は、NGOの方が市内観光に連れて行ってくれた。町の中心部にある周りを池に囲まれた美術館や寺院を見に行きました。その寺院からですぐ、物乞いインドではバクシーシとよばれる子供が1歳にも満たないような赤ちゃんを抱いてお金やものをもらおうとよってきた。はじめてのことだった。先生や周りからあげてはいけないよ、と言われていた。それはきりがいいからだ。何人もの子供や大人までもがTシャツをひっぱってくることにとまどいは隠せなかった。インドで受けた衝撃の中で一番印象にのこる出来事だった。ホテルに帰ってからもそのことしか話さなかったことを覚えている。インドに来てからの食事は機内食の段階から辛くなっており、辛いものが苦手な私には合う料理があまりなかった。でも、メンバーの食事係りがみんなに気を使ってくれて辛いものは、あまりださないようにしてもらえたおかげで食事も気を使わなくてよかった。3日目の朝を迎えて、今日からいよいよ作業開始だ。バラチャディ村の小学校までは車で50分位の所で、道は舗装されてる部分5%に対して、舗装されていてもガタガタなところ50%、舗装されていないところ45%。はじめは、行くだけでしんどくなるし、こんなガタガタした道で眠ることさえできるかと思っていたけど、いまとっては、なつかしくもあり最後なんてみんな車で爆睡するまでになるんだからすごい。小学校に着いたら、作業を手伝ってくれるインド人労働者の人たちが待っていてくれて、お互いがんばろうと言葉では言えないけどしっかりと握手

をかわした。作業はじめに礼拝をさせていただき、それが合図になって働き出す。みんな天理での作業をしているおかげで、手分けして作業をスムーズにこなせていった。そのうち小学校の生徒たちが集まりだし、その子供たちの目はきれいだった。きれいすぎて私にはまぶしささえ感じた。作業は、気温の上昇とともにペースは落ちつつあったけど、みんなふんばっていた。お昼は、アンキットという車で30分くらいもどった場所までいきそこで自炊する。メニューは、日本からもってきたカップラーメンと日本のご飯。インドに来て間もなかったけど、やっぱりなつかしい感じがして日本で食べるよりおいしく感じた。お昼からはまたさらに気温が上がるために、長く休憩をとり体を休ませてから作業に取り掛かった。一日目の作業はみんなが一日でどれだけの土嚢がつかめるかという目安にもなるからみんなそれぞれにがんばっていたが目標まではあとひとふん張り足りなかったぐらいに終わった。

ホテルに帰ってから一日目の作業のことについては、それぞれにいろいろあったと思うが、私は疲れたよりも暑かったなという印象しかなかった。でもその日寝た時間が自分でも驚くぐらいに早かった。普段10時とかそんな時間には寝ない私がお風呂から出て、布団に入った瞬間寝てた。二日目の作業の朝は筋肉痛に悩まされた。何人かのメンバーは下痢になっていたが、私は健康そのものだった。車で作業現場まで行くときの景色はまだ珍しくて、目を見開いて道行く牛やど派手なトラックや車、昨日車に轢かれて死んでいた犬がまだ放置してある現状、川で洗濯している女性。車から見る景色はまだまだ書ききれないくらいにあり、すべて記憶している。それだけ私には新鮮にみえてすべてを残そうとしていた。作業は、急ぐこともなく遅らせることもなく続けられた。出来上がっていくことに私は、楽しさを覚えたりして、作業中インド人労働者とも気さくにはなすこともできるようになるとまた楽しさが倍増した。インド人は気さくな人たちばかりだが、時には作業をさぼるやつもでてくるんだ。自分の仕事が終わるとそれしかりなくなってしまう。そういうインド人にはきちんと働けと言ってやった仕事するからと言われ言ってみたら、ふてくされた感じでやりはじめたが別に怒っても後腐れはない人種だと聞かされていたので、そのあとも見ていたけどその通り陽気なやつらばかりだった。それからの作業も一日なにをしているのかわからないけどずっと、私たちの作業している姿をずっとみているやつもいれば、歌を歌ってふざけているのか私たちに教えているのかわけもわからない歌を歌っているやつもいる。小学校の生徒たちも学校に早くきて手伝いをしているのか邪魔しているのか、本当にインド人という人種は陽気なやつらが多い国だなと思った。ホテルの近くにお菓子屋があり、いつもの仲間たちも、どこかの音楽かわからないけどその音楽を大音量でかけて、踊れ踊れと騒ぎだす。私たちは笑うしかなかった。インドの結婚式にも参加することが出来た。女子学生はサリーを着せてもらっていた。結婚式は、巨大な土地にテレビカメラが数台、華やかすぎるくらいの照明や花飾りに驚いた。貧富の差がいやってうほど垣間見えてインド事情がよくわかった。

ボンガも着実に完成していき、内から見上げたボンガはきれいだった。テレビ取材もあった。次の日の放送を楽しみにまった。放送がはじまった瞬間から、みんな笑い声がたえずテレビ出演なんてはじめてだったからカメラに映っている自分の顔に照れてしまった。

作業はいよいよ屋根部分に突入。

屋根はかんろだいをモチーフにしている、屋根はわらを敷き詰めて茅葺にする。下からみた感じは光が少しはあって暖かいイメージがある。本当にいいものができた。小学校の子供たちと村の人たちと喜びを分かち合い祝った。そして、小学校を後にするときにインドプロジェクトに3回もかかわってきたメンバーたちが村の人たちと抱き合っていない姿をみてもらい泣きをしてしまった。私は、作業期間に子供たちとの交流が大半だった。その子供たちも知ってかしらるか悲しげな表情を浮かべ私の名前

を呼んでくれた。そのときの顔は忘れられない顔になると思う。1回目の私たちでもいろんなものをもらったのに、3回目の人たちは耐え切れなかっただろう。たくさんの言い切れないほどのものを、バラチャディの子供たちからもらい、インドという国の現状を肌で感じる事ができたことに本当に感謝します。インド観光。「観光とは光を観る。というところにある。」ある先生が車のなかで教えてくれた言葉。私は、自分なりの光を見たような気がしたそんなプロジェクトでした。このプロジェクトに参加させてくれた親にも感謝します。また、今後も続けていきたいと思えるような仲間に出会えたことも感謝です。

あたりまえの生活が貴重だと感じさせられたプロジェクト

佐藤綾香 (宗教学科、3年次生)

初めての海外で不安であった。必ず体調を崩すと聞いていたこと、治安が悪いということがその理由だった。私達がボンガを建てるのはインドの田舎と聞いてはいたが、実際に目で見ないことには安心できない。

ジャムナガルのホテルに着いた日の部屋割では、私達の部屋は一階の角部屋だった。一階というのに多少の不安はあったが、もともと旅行に来たのではないので、私達はそれに従って部屋に入った。荷物を置いて、ソファに腰掛けた時に、男の人と思える影が横切った。冷房器具と壁の間に網だけしかない部分があったのだ。その部分から男性が見えたのだ。私達は怖くてたまらなくなり、先生に無理を言って部屋を替えてもらった。海外への不安と、部屋のなかが丸みえという恐怖心から、わがままとはわかってはいたが、これだけは耐えられなかった。

私達の作業する場所はバラチャディ村というところで、空と海、自然が美しい村だった。こんな美しい村で地震があったとは信じられなかった。

作業する小学校には、前回建てられたボンガがあり、そこへ荷物を置いた。外は日差しが強くて暑いのに中は涼しくて気持ちよかった。これが完成して図書館になったら最高だろう。作業は大学での研修とたいして変わらないと思っていたのに、実際はセメントと土を混ぜるのが手作業でせねばならず苦戦した。

ボンガが完成に近づくとつれ、作業も高い場所へ移り、女性は手が空きだしたので、小学校の近くの民家へ行った。その家には歳の近い女の子がいて、すぐ仲良くなれた。プレゼントに孔雀の羽をもらった。日本では動物園にしかないはずの孔雀が、インドでは野生で自由に生きている。自然が豊かだからだろう。

別の日には、近くの天理大学がつくったチェックダムの見学へ行った。見た目は普通の壁なのに、雨期になるとそこに水がたまり、バラチャディ村の水を確保できるらしい。これによって水が無くなり、苦しむことも無いだろう。仲良くなった人が苦しい生活をするのは悲しい。しかもそれが水ということ。私達の住んでいる日本は蛇口をひねれば、当たり前水がでる。だから、当たり前水汚す。彼らが日本に来て私達の水の使い方を見たら、彼らは軽蔑してしまうのではないだろうか。インドに来なければきっと水を大切なものとは思わなかっただろう。

街にでると、お金をもらいに来る人がいる。車いすに乗った少年、赤ちゃんを抱っこした少女、指が二本無い老人。私は怖くなってしまった。同じ人間で平等だ。と思っていたのに、私にお金をくれと言ってくる。私は、お金を渡せなかった。その行為自体が、彼らと平等な関係ではないと思ったからだ。今回の「国際参加」プロジェクトで、たくさんのことを感じた。この気持ちを忘れたくない。

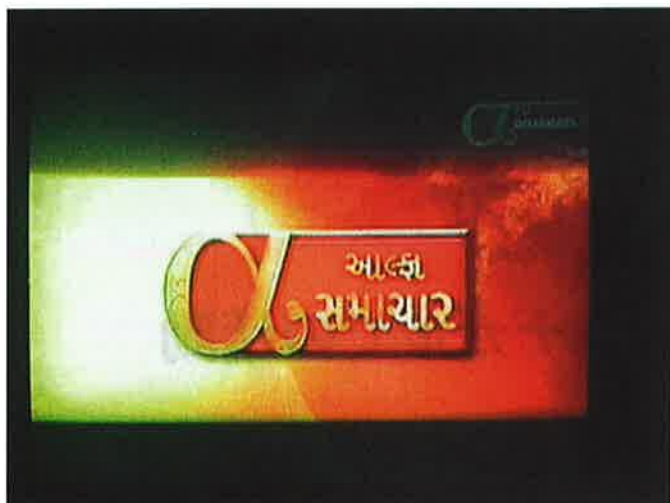
写真で見る

インド・グジャラート州ジャムナガルでの活動



現地でテレビ放映された本プロジェクトの紹介「画面」
完成したアースバッグによるボンガ図書館 —バラチャディ小学校—
ボンガ図書館式典
天理大学チェックダム —バラチャディ村—
ボンガモデルと竹、日本庭園 —アンキット村—
他者への献身 —「国際参加」3年間のあゆみ— 2001年～2004年3月

現地でテレビ放映された本プロジェクトの紹介「画面」



2004年3月2日に放映された「テレビ」ニュース



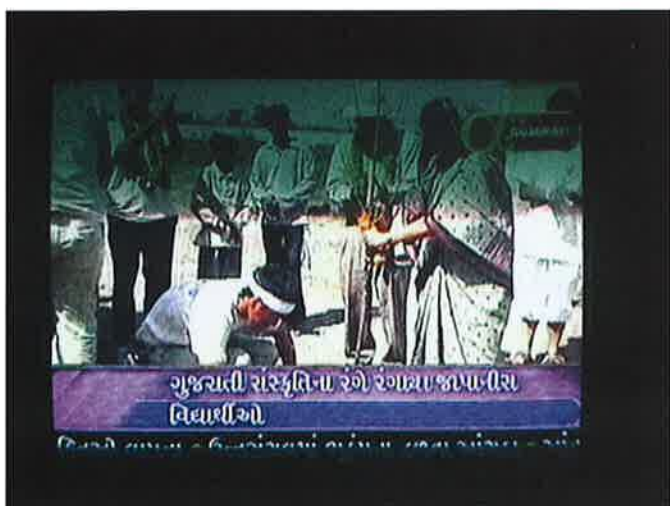
記者会見する井上センター長と近藤隊長



ボンガ図書館現場で作業する風景の紹介



3つ目のボンガが完成するところの紹介



JSSのタンナさんとセンター長による桜植樹の紹介



インタビューに答える井上昭夫センター長

完成したアースバッグによるボンガ図書館
— バラチャディ小学校 —



アースバッグによるボンガ図書館 —— バラチャディ小学校



完成した図書館 一寄贈式典のための飾り付けも完了—



正面左手よりみたボンガ図書館



正面反対側からみたボンガ図書館

ボンガ図書館式典



ブーゲンビリアの花で飾られたボンガ図書館入り口



ボンガ内部—飾られた屋根を支える芯柱—



子供達の祈りの歌



芯柱を中心に踊り出した子供達

天理大学チェックダム ーバラチャディ村ー

2004年3月のチェックダム



チェックダムを上流方向からみる (2004.3)



チェックダム正面 (2004.5)

2003年のモンスーン後のチェックダム



満々と水を蓄えるチェックダム (2003.9)



チェックダムによる効果 ー付近の井戸の水量ー

ボンガモデルと竹、日本庭園 —アンキット村—



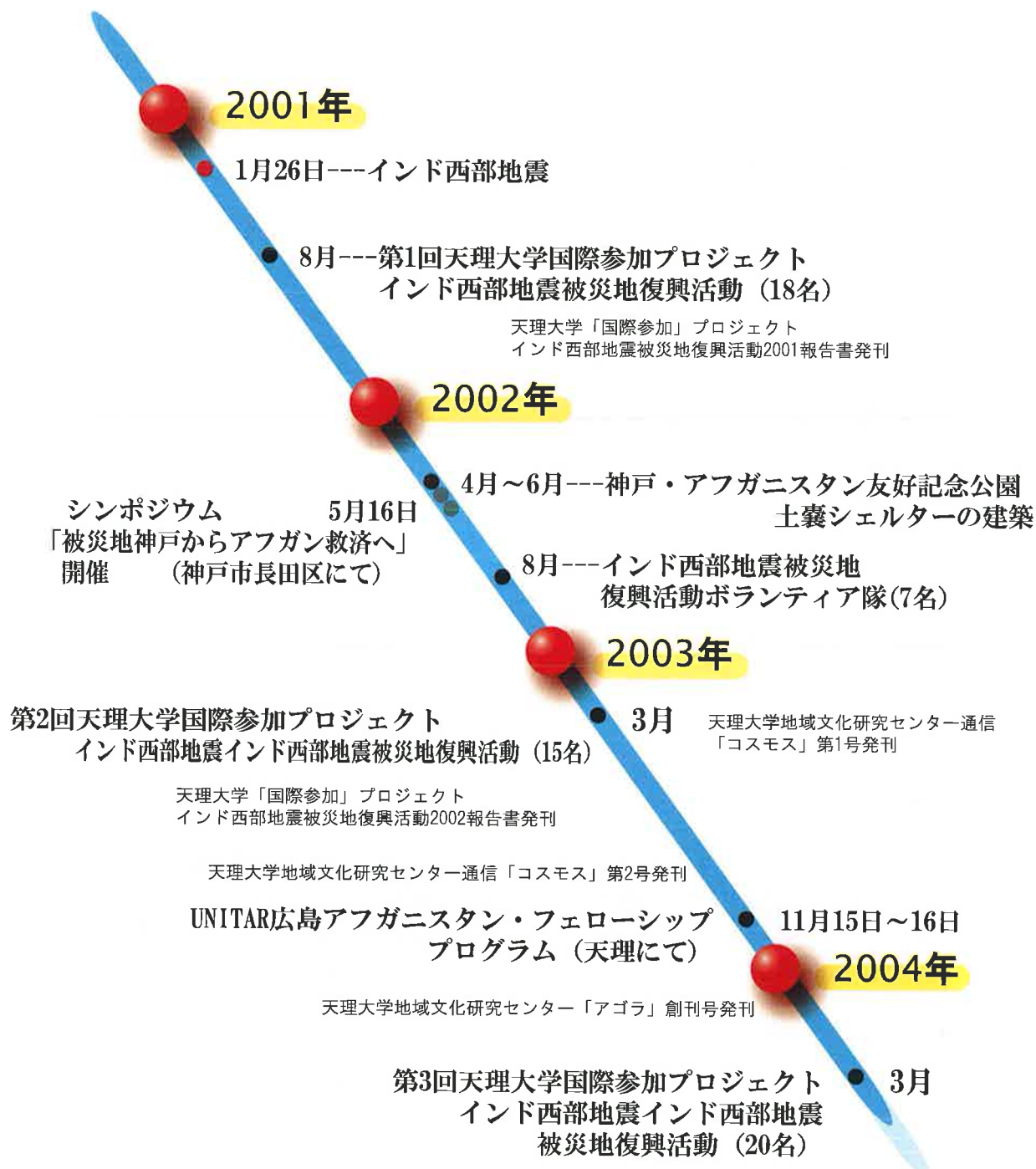
日本庭園からボンガモデルをみる (2003.9)



竹に囲まれたボンガモデルの前で休憩し、昼食をとる現地の人 (2004.3)

他者への献身—「国際参加」3年間のあゆみ—

2001年～2004年3月



このプロジェクトに導かれたことに感謝

野田麻美 (宗教学科、3年次生)

今回、「国際参加」プロジェクトに参加できて良かった。初の海外で不安もあったが自分自身の世界が広がったと思う。行くきっかけは堀内みどり先生の講義でインドに興味を持ち、募集が終わった時点のこのプロジェクトに無理にお願いして参加しました。

インドに着いて、まず最初に思った事は、においでした。独特で本当に臭かった。だけど、たったの二週間で慣れていた自分に驚きです。また、インド人は車の運転が荒く、交通ルールがめちゃくちゃなので、いつか事故にあうと思っていたけれど無事で良かったです。しかも牛が道路にたくさんいて通行のジャマになったりと日本では、まず見れないものだったので興奮しました。

私たちの目的であるバラチャディ村はジャムナガルの田舎で、ホテルから一時間ぐらいの距離です。この村は静かでのんびりしていてホッとする村でした。村の人たちは、とても気さくに声をかけてくれるので自然にコミュニケーションがとれ、すごく楽しかったです。作業の休憩などには、お互いの国の言葉を教えあったり作業中は、いろんな言葉が飛び交っていて、自然にニヤけてしまうくらいhappyな事でした。村の子ども達は作業を手伝ってくれて頼んでもいないのに何かをやろう、手伝おうという気持が伝わってきて私のやる気を、めーいっぱい引き出してくれました。本当にピュアな人間だと感じました。また、自分を見直すチャンスをくれて、バラチャディは本当にすごく良い環境だと思いました。

ホテルに帰る途中の道路には、たくさん家があり大豪邸もあれば布切れを屋根にしている家もあって、どこを見ても貧富の差が目に入ります。街を歩くと物乞いをする女性や子どもたちが、たくさんいて、これが現実なんだと思いました。男の子に服を引っ張られて、すごく怖くて同じ人間なのに違う生き物みたいに感じました。自然に汚いとか違う人間だとか、かなり見下している自分が嫌でした。

今回、国際プロジェクトに参加して、いろんな体験が出来て良かったと思います。日本での生活では感じれないものや見れないものがたくさんあり本当に自分自身の為になりました。このプロジェクトに導いてくれた事に感謝したいと思います。ありがとうございました。

観光では味わえないプロジェクトの内容

沖 佳奈代 (人間関係学科、2年次生)

インド！一体どんな国なんだろう、いろいろ考えながら参加したこのプロジェクト。最初は授業で先生がこのプロジェクトの宣伝をしていたことがきっかけであったが、何事も経験あるのみだと思い、思い切って参加してみた。しかし、思い切ってみたものの、本当に行くのだという実感がなく、体がずっとフワフワしていたのを覚えている。しかし日本を発ちインドに着いたときの暑い風が本当にインドに来てしまったという実感にあっという間変わった。日本とは違う匂いや風、風景など、見えるもの、感じるものにとってもワクワクしていた。

最初に見た風景は、ムンバイ到着後、ホテルに向かうバスから見た路上に住み寝泊りをしているたくさんの人達であった。根強いカースト制度による階級の違いを目の当たりにして悲しい気持ちになった。インドの街並みは、誰が見てもすぐに階級の差が歴然と分かる国であると思った。また、実際に、目にした時、同じ人間として、これほどまでに階級の差があるというのは、勿論日本ではありえないことであると共に、自分がいかに今幸せな場所で生活しているのだという事を改めて感じた。何でも当たり前な

日本人にとって、私自身インドに来たことでたくさんの気づきが自分にとって、とても良い勉強であったと思う。

さて、皆とボンガ作りをはじめ、現地の子供達や作業を手伝ってくれた人たちと同じ時間を過ごして気がついたことがある。それは、とても皆楽しそうに生活していることである。初めは全然違う日本人が来たから、現地の人々はいつもと違う環境に楽しみを覚えているだけのことと思った。しかし、普段の生活はすごく狭い部屋（ワンルーム）に家族5人で住み、もっと多いと10人までもがそう大きくない家で生活しているのだという。村の女の子のお宅を訪問させてもらったが、窮屈で本当に生活できるのかと思うほど狭い家だった。それでも、人々は何の不満もなく、とても幸せそうに暮らしている様子がすごく分かった。私なら、絶対その環境では生活できないと思ったし、それを当たり前として生活している現地の人はそのが普通なのである。でも私は、そのような人々と比べると、普通の何不自由ない暮らしをしてきたし、末っ子で育てられたわがままっ子だった私にはそんな環境で育ってきた人達の私生活は考えられないと思った。それと同時に、自分の生活を振り返って、わがままを言えば何でもあたえられる環境にいた私は反省もした。わがままを言うこともできないほどお金もない家もあるのに、それを考えたら、恵まれた環境に住む私はもっと考えなければならないことだと思った。そして、実際の自分の目で見えてきたインド人の生活環境は今までの自分の生活を見直す良い経験にもなったと思う。

一日、一日様々な出来事があり、色々感じながら過ごした。本来メインのボンガ完成は、このインドに来てみんなの手が加わって作り上げた最高の図書館だと思う。喜んで子供たちが使ってくれたらそれだけでいいと思うくらい、達成感があった。同じメンバーの人達とも同じ経験を通して仲良くできたと、とても思い出に残る旅だと思った。みんなで作り上げたボンガ作りは一番の思い出になった。

また、現地の子供たちの可愛い笑顔も印象にのこっている。作業中は皆がやってきて一緒になって手伝い、疲れている時でも皆、笑顔で話しかけてきてくれた。言葉は通じなかったけど言葉でないコミュニケーションを通して仲良くなった子供たち同様、一緒に作業を手伝ってくれた人達とも出会えたことにとても感謝している。

また、ボンベイにある布教所では、渡辺さんのお話を聞かせて頂いた。竹のこの会という母子家庭や貧しい家族への就学援助をしているとのことだった。人を助けているという話を聞いて、世界では沢山の人が苦勞しながら生活しているが、むしろそんな人達に比べたら、私たちの生活は幸せで、むしろ助けてあげるべき立場に立たなければならないなどと思った。自分はありがたい立場で生活していると感謝することはとても大事なことでけれど、もう少しボランティアとして心身を動かして、行動せねばと渡辺さんの話を聞いて思った。

最後に一緒にインドに来た15人のメンバーははかり知れないほど個性の強い人たちばかりで、毎日が新鮮な気分だった。皆、思いっきり自分を出してきて、私も負けじと食いついていったほどだった。同じ下痢を体験した一メンバーとして、楽しく2週間を過ごすことができとても楽しかった。一生のうちのこの2週間は貴重な体験だったし、初めは行動することに意義があると思って何にでも参加してみようと自分自身では軽い気持ちで参加していた部分はあった。だけど、それは本当に自分にとって絶対できない体験をさせてもらったなどと思った。このプロジェクトでしか、味わえない経験をした。特に女性はサリーを着る機会があり、NGOの関係で結婚式に招待してもらい、ただの観光とは一味も二味も違うものであった。一瞬、本当に夢の国にでも来たかのような感覚を覚えたほど貴重な体験だった。これで最後となるインドでの国際参加プロジェクトに参加できてとても幸せだった。

この二週間、井上先生、近藤先生にはお世話になりました。ありがとうございました！

自分を見つめなおしたプロジェクト

田中 映理子（中国学科、2年次）

「国際参加」プロジェクトに参加してみようと思った理由は、自分にも何か出来ることはないか、何かやってみたいという思いがあったからです。初めは、行く国がインドであることに不安がありました。インドは、貧しくて砂っぽい汚れた所だというイメージがあったからです。実際に行ってみて感じたのは、とても活気のある騒がしい国だな、ということでした。人の流れも激しく、辺りからは色々な音が響いていました。車のクラクションの音、物売りの声、動物の鳴く声。全てが日本ではあり得ないものばかりでした。

パラチャディ村での活動は、土のうでボンガの図書館をつくるというものでした。暑い中での作業に疲れることが多くありましたが、現地の人々との交流や小学校の子どもたちの笑顔で、なんとか乗りきってきました。みんな陽気で明るく、優しい人たちばかりでした。

自分に何か出来ることがないか、と行って参加したプロジェクトでしたが、参加してみて、やっぱり自分には何も出来ないんだな、ということを感じました。日本での生活は、欲しい物があつたら何でも簡単に手に入るし、やりたい事も好きなようにやれて、不自由もなく生活してきたからです。何でも、どんな事でも、自分一人でやってきたような気になって生活してきたからです。そんな自分に何が出来るというのでしょうか。

インドの人々は、日本とは違って、それぞれ自分の役割というものを果たしていました。無駄の少ない生活をしていました。自分がやらなければならない事に一生懸命で、生きようとする力をすごく感じられました。生活は貧しいけど、心まで貧しいわけではなかったという事を感じ、いかに日本の生活が心の面で貧しいものなのかを知りました。インドの人々の生き方は、とても素敵だなと思いました。少しでも見習いたくて、どうしたらいいのか考えに考えぬいて出した答えが、私も自分の役割というものを見つけて、それをしっかりやろうというものでした。今思えば、何て単純な考えなんだろうと恥ずかしくなりますが、あの時はそればかり頭にあって、作業中でも何か仕事がないか、自分に出来ることがないか探しました。どんな小さな事でも気がついたらやれるように。でも、なかなか上手くいきません。体力を消耗するだけで空回りの連続だったような気がします。そうして気付いたことが、何かの役割を果たしているから、自分は何かをやり遂げることが出来ているというのではなく、一人ひとりがやっていることがつながって、一つのもので出来てくる。自然のサイクルにも似ていて、今回のボンガ作りというならば、土を混ぜる人がいて、バケツに水をくむ人がいて、土のう袋に土を入れる人がいて、それを積み上げていく人がいる。そうして、無事完成させることが出来たのです。どの作業が欠けてもボンガを作ることは出来ません。一つ一つの作業が、一人ひとりの役割が大切だったんです。そのことに気付いて本当によかったと思います。

日本での生活は、どこか自分だけの力で何でもやってきたような高慢さを持ってしまいがちです。そうならないように、インドで感じたことを心に置いて日々生活していきたいと思います。

この二週間、本当に貴重な経験をさせて頂きました。井上先生をはじめ、一緒に活動してきた人たちに感謝しています。本当にありがとうございました。

喜びを与えてくれたプロジェクト

高木 宏明 (体育学科、2年次生)

この「国際参加」プロジェクトに参加しようと思ったのは、「誰かの役に立ちたい」「小さな自分でも必要としてくれている人が世の中にいることを肌で感じたい」という思いからでした。インドではお金持ちもいれば、その日の食べ物もなくして苦しんでいる人がいるくらい貧富の差が激しいと聞き、この活動で少しでも貧しい人々の役に立って喜んでもらいたいと思い参加を決めました。今回活動したグジャラート州ジャムナガルのバラチャディ村は豊かとは言えない村でした。しかし、子供たちや作業に関わった人、前の道を通り過ぎる人はみんなステキな笑顔。気軽に「Hi!」と声をかけ、現地の言葉や歌を教えてください。ホテルの従業員たちもすごくフレンドリーでした(何か頼んでもすぐに行動にうつしてくれないのはどうかと思いますが…)。とにかく、生活は豊かなのに疲れた顔して暮らしている日本人となんでこんなに違うんだろうと考えさせられました。

作業は毎日30度以上の中で行われました。途中で軽い下痢に襲われましたが、力をあわせて無事にボンガが完成。今までの「国際参加」プロジェクトで完成していたボンガ2基との間に壁と屋根ができ、出来上がった図書館はとても立派でステキなものでした。作業最終日には校長先生やNGOの方々など多くの人が集まって式典が行われました。小学校を離れる時、現地の人が泣いて別れを惜しんでくれたのを見た時、「自分はどれだけ一生懸命活動したのだろう」という悔しさと同時に、「自分を必要としてくれている人がいた」という嬉しさがこみあげてきました。今回の図書館づくりでは、現地の人々以上に自分自身が喜びを与えてもらった気がします。

ジャムナガルでの活動を終え、ムンバイでは市内観光をしました。ジャムナガルもそうでしたが、物乞いをしてくる子供や老人、親子をたくさん見ました。5~6歳の子供が2~3歳の弟を抱いて「弟に何か食べ物をあげてくれ」と、おみやげ袋を握った私たちに訴えている姿はとてもショックでした。そのあと天理教ムンバイ布教所に行き、現地での活動内容を聞きました。その他に今回の「国際参加」プロジェクトでは結婚式招待&新郎新婦にTシャツプレゼント、NGOの記者会見に同席、NGO役員宅での夕食と多くの貴重な体験をすることができました。

「国際参加」プロジェクトは授業で味わえない素晴らしい体験をたくさんさせてくれました。今回の活動でお世話になった近藤先生、井上先生、技術者の方々、活動を支えてくださった多くの先生方、本当にありがとうございました。そして多彩で愉快的な14人のメンバーと一緒に活動できたこと、本当に感謝・感謝・感謝です。

私の「国際参加」プロジェクト

久保 智美 (人間関係学科、1年次生)

このプロジェクトに参加した理由は、インドに行ってみたいというだけだった。小学校の図書館をつくりに行くという、プロジェクトの主旨を実感できたのは、インドに行き作業に向かう途中、車の中からまだ地震の傷跡らしきものが残っている場所を見かけた頃からだった。

出発前にはいろいろな不安があった。インドには行ってみたいが、この国については何も知らなかった。病気になるのではないかと、下痢にはなりたくない等の気持ちが強かった。いま考えると、日本とは全く違った国へ行くことへの不安だったのだろう。実際にインドという地を見た時には、もう出発前ま

での不安はほとんどなくなっていた。

作業をしたバラチャディ村は、とてもどかで良い所だった。空は毎日綺麗で、その下には大地と緑しかない風景を、往復の車窓から眺めるのが好きだった。村の人たちも、優しく気さくな人たちばかりだった。

作業はいくつかのグループに分かれて行った。初日はなれない部分があったが、日を重ねるにつれ、そういった部分もなくなっていった。子供たちも慣れてくると、土を運んでくれたり、水くみをしたりと手伝ってくれた。土と砂利とセメントを混ぜたものに水を加え、それをアースバッグに入れ、積み上げる。力のない私には、袋につめるまでしかできなかったのも、同じ動作の繰り返しがつづいたが、1日中やってもあきないなと感じたことを覚えている。

ボンガが完成した時は、やはり嬉しかった。ボンガの上には、怖くて乗ることができなかったのが心残りだが…。

こうした作業を通してでも人と触れ合うことができるんだと思った。すごいなとも思う。現地の方は、私たちの名前を覚えてくれようとするし、日本語を覚えようとする。私たちも少しずつ、彼らの言葉を単語だけでも覚えていこうとした。言葉や肌の色が違う人と親しくなることは、そんなに難しいことではないのかもしれない。

このプロジェクトに参加して、自分が得たものを私はまだきちんと言葉にできずにいる。しかし、今回でインドでの活動が最後というのは残念だ。また次回もこのプロジェクトに参加したいという気持ちは確かだ。

国際協力論と「国際参加」プロジェクトへの参加

矢澤 智子 (歴史文化学科、1年次生)

この「国際参加」プロジェクトに参加するにあたって、国際協力論の授業を履修していて良かったと思う。履修するまではインドへ行きたいな、という漠然とした気持ちだった。しかし、授業の中で何度もボンガやチェックダムの話を聞き資料を読んでいる内に、自分がやろうとしている事がおぼろげながら形になってきた。また、インドの置かれている状況や社会背景も同時に勉強することができた。もう一つ、事前のボンガ作り研修もよかった。今はもっと参加しておくべきだったと反省しているが、少ないながらも体験しておいて正解だ。

ボンガ作りに関して

何よりも暑かった。日本と違い湿度が低いので過ごしやすかったが、やはり午後から炎天下での作業はきつかった。特に夕方7時まで作業の日は体にこたえた。後半になるとスコップや鍬の柄が折れてしまい使いづらい上に、数が減ってしまうので手持ち無沙汰になる時があった。また、現地で調達された袋は、たまに下の方が破けているので注意が必要だった。

様々な事があったが、それだけに完成した時は非常に嬉しかった。ボンガの頂上から臨む景色は、一方にはアラビア海が見え反対には草原が広がるという初めて見るものだった。登った時はちょうど心地よい風が吹いていて、とても気持ち良く疲れが一気に吹き飛んだ。贈呈式では子供達が歌ってくれたり、インタビューがあたりして非常に感動的だった。

地元の人達との交流

学校の敷地内で作業をしていたため、毎日毎日子供達が遊びにきて手伝ってくれた。全く言葉は通じ

なかったけれど、身振り手振りで何とかなるものだと思った。こちらの子供は目がクリクリしていて本当に可愛い。トイレを貸して頂いたプラビンシンさんと家族の皆さんには毎日行っていたにも関わらず、いつも明るい笑顔で迎えてくださった。

食事について

我々向けに辛さをかなり押さえてくれていたみたいだが、それでもかなり辛くて食べられない物もあった。反対にデザートはすごく甘くてびっくり。インド料理は極端なものが多いと思った。カレーは日本と違ってサラサラしており、付け合せのご飯もパラパラだった。インドカレーはご飯よりナンと一緒に食べた方が美味しいと私は思う。

気になったこと

まず、道路。ポコポコしている上に、左右関係なしに走る。二重追い越しは当たり前で冷や冷やさせられっぱなしだった。信号機はあるものの、点灯していないものが多く皆無視していた。

牛が多い国だということは知っていたが、犬もこんなに沢山いるとは驚きだった。どこへ行っても牛か犬か人。猫がどうしていないのか不思議に思った。

やはり気になったのは貧富の差である。滞在期間中お世話になったタンナ邸は、清潔で広く、大理石の床もピカピカだった。逆に、買い物に行くと必ず「バクシーシ・バクシーシ」と言いながら裸足で破れた衣服を着た子供が後をついてきたり、手を引っ張ったりする。子供だけでなく、大人や老人も同様だった。

最後に

期間を通して一番印象的だったのは、現地の人たちのキラキラした眼と人なつっこい笑顔だ。どうして、いつも笑顔なのかと疑問になるくらい良く笑う人たちだった。決して豊かな生活ではないだろうが、私達を温かく歓迎してくれて非常によくしてもらった。

インド滞在を経て思うのは、日本がいかに恵まれている国かということだ。知識として知ってはいたが、身をもって経験した。普段の生活がいかに幸せかを改めて感じた。



ボンガに集まってきた子供達



天理大学チェックダム付近で放牧する羊たち

2. 授業「国際協力論（実習を含む）」履修者の授業レポート

国際協力論を受講して—学習は平和への第一歩—

鈴木 和果菜（ヨーロッパ・アメリカ学科、1年次生）

高校生の時に「高校生平和の集い」といって、大阪の高校生が集まって戦争や平和について学習し、多くの人と一緒に「本当の平和とは何か」や「どうしたら平和な世界をつくれるか」などを考えるイベントを開催する集まりに参加していた。そこでは、世界の貧困問題や、紛争についてみんなで話し合い、学習していた。その頃から、こういう事について大学でも学べたらなぁと思っていた。

大学案内等を通じて、天理大学では国際協力論やNGO研究といった、自分が学びたいと思っていた分野が学べることを知った。そして、もう一つ興味があるドイツ語も学べるという条件が揃っていた、これが天理大学に決めた理由である。

この「国際協力論」の授業は少人数であったし先生が二人もおり、とても学びやすい環境だった。睡眠に負けてウトウトする時もあったが、分からない点があったりすると気軽に質問できた。三回にわたってゲストに来てもらいお話をしてもらった授業があった。三人の中の二人は天理教の方々と、アフリカやアジアへ行って村の人々に身体検査をしたり子供達にノートや鉛筆や靴などを渡して子供達が勉強できる環境をつくる手助けをする活動をしており、もう一人は天理大学の卒業生で神戸にあるNGOに勤めている方だった。現地で実際に活動をしている方のお話を直接聞くという機会はめったになくとても勉強になった。

授業の中で最も関心を抱いたのは、ODAがインドネシアの村にダムを建設した件であった。そのダムが原因で村の住民達の生活や伝統が破壊されたとし、住民がODAを提訴するという問題についてである。ODA側は住民のためだと考えて建設したのにそれがかえって住民達を怒らすという結果になってしまった。どうしてこのような事になってしまったのか不思議に思った。外務省はインドネシア政府に責任があると言っているが、ダムを建設する場所に住んでいる人々に直接現状を聞いて本当に必要であるのかを考えてから計画を立てるべきだったのではないかと思う。結局ダム建設で儲かったのは建設に携わった人々で、何も住民達のためにはなっていない。このような問題を知るまではODAの存在は私にとって遠かったし、しくみもほとんど知らなかったが、授業を通してODAに私達は年間約一万円を費やして私達と深く関わっていることが分かりODAのさまざまな問題に耳を傾けるようになった。

この授業の参考になればと思い、私は難波でPHD (PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT) 主催の「今、私達にできる国際協力」という講座に参加した。そこでは、国際協力の問題点などを取り上げていた。例えば、「貧しい村に文房具を送ったが役に立たない場合があるのはなぜか」や「人材派遣をして新しい技術を取り入れさせてもうまくいかない場合があるのはなぜか」などといった問題である。文房具などを送ると子供達はとても喜び、読み書きができるようになるのではないかと、人材派遣によってその土地の人々がより豊かに暮らせていると思っていたから、そのような問題があると知り、驚いた。自己の満足ではなく本当にその土地の住民達のためになる支援をしなければいけない。土地を耕す機会を作っている大企業だけが儲かるような事をして現地の人々のためにはならないのだということを知った。この講座にも、国際協力論の授業にも参加して本当に良かったと思う。「国際協力」と聞くと難しく大掛かりなことに聞こえるが、身近にできることはたくさんある。私達が世界の現状

に目を向けて考え、学習することはとても大切であるし、人々が平等に平和な暮らしができる世界をつくっていく一歩になると思う。

授業を終えて 一男一人の満足感

長谷川 隼 人 (ヨーロッパ・アメリカ学科、1年次生)

もともとこの国際協力論という科目は、友人から聞くまではその存在も知らなかった。友人に勧められて第一回目の授業の時に教室に行ったときの驚きは今も鮮明に覚えている。

授業が始まる時間が迫っても、百数十人収容の大教室にいるのは十にも満たない生徒。一瞬、「教室を間違えたかなあ」との思いが脳裏をよぎった。しかし、時間になると先生らしき方はいってこられて、授業が始まった。「こんな広い教室にこれだけの人数か?!、しかも男は俺だけや!」と思い、驚きとともに履修をやめようかと思った。しかし、前から「世界ウルルン紀行」などの旅番組や、貧困問題等の現代の人類がかかえる問題には興味があったので、授業を受けているうちに早くものめり込んでいて、男ひとりということはあまり気にならなくなった。それからというもの、金曜日の国際協力論を受けるのが楽しみで大学に行っていたようなものだ(事実)。前期だけの科目というのがとてももったいないと思う。

国際協力論の授業内容は、NGOなどから外部講師を招いたり、インドに長年すんでいた方を招いたり、非常に充実した内容の濃いものだったと思う。このようなことは他の授業を履修しているだけではまず経験できないだろう。他にも、いつかみたビデオの中で「貧困のために娘が売春をしてまで生活費をまかなっている」と語っていた人がすごく印象に残っている。その人が本当に辛そうな表情でインタビューに答えているのをみて、この地域での貧困の深刻さが強く僕の脳裏に刻み込まれた。文字や数字ばかりの配付資料だけでは、分かりにくくイメージしにくいのが、ビデオを組み込んだこの授業は各テーマが身近なこととして理解できた。

国のために世界銀行から借りている費用金額がインドを抜いて日本が一位だったという話には、かなり衝撃を受けた。日本も過去に様々な支援を受けて現在の日本があるわけだから、今度は日本が動くときであることはいうまでもない。天理教の信者ではない僕がいうのもおかしいかもしれないが、天理教には「たすけあい」という言葉がある。これは助けられっぱなしでも、助け放しでもダメだ。助けあってこそその「たすけあい」だろう。実際、僕がそうであったように、日本は十分な支援を行っているように感じている人が多いだろう。しかし、国家予算から支援に出している金額の割合は、他の国々と比べてとくに高くないということを知って、それは間違いだったと気づかされた。

今は、とにかくインド支援に参加したい気持ちが高まり、楽しみである。はじめはインドの観光を試みようとの気持ちが大半だったのだが、授業を受け終えた現在は、早く現地に行って貧困から繋がる飢餓や設備不足による衛生面の悪化などを実際に自分の目で見てきたいと思うようになった。授業が終わったら「はい終わり!」というのではなく、具体的なことはまだいえないが今後何らかの形につなげていけたらと思う。

国際協力論の授業を受けて —インドの誘いのポスターに惹かれて—

矢澤 智子 (文学部歴史文化学科、1年次生)

歴史文化学科の所属学生なので国際文化学部の授業は全く知らず、とる気もあまりなかった。こんな私がこの科目を履修するきっかけとなったのは、「国際協力論を履修して、この夏インドへいこう」というポスターを目にしたことだった。もちろん国際協力とかボランティアには、もともと興味があった。でも、その時はインドに行ってみたいという単純な理由だけだった。それで、一応シラバスをみると「実習あり」と書かれており、私は講義よりも実習の方が好きなので履修を決意した。

初回の授業、指定された教室は二号棟だったので、きっと大勢の人が来るのだろうと思っていた。だが、実際は七人。しかも国際文化学部の人ばかりだったので、正直楽しくやっていたか不安だった。また、こんな少人数なのに先生は二人もおられるので驚いた。

授業はシラバスに載っていた通りで、私が想像してような内容だった。他の講義にはない外部講師を招いての授業は、特に楽しく勉強になった。外部講師の皆さんは実際に現場で働いたことのある人ばかりで、国際協力を必要としている地域の現状、そこに生活している人々の生の様子などを聞くことができたのは、インドに行く上で大いに参考になった。また、耳からの情報だけでは聞き流してしまいがちだが、スライドや写真をふんだんに用いて下さったおかげで、90分あきずに集中してきたし現地の様子も少し分かった。一回目の講義では、インドの本格的なチャイを飲むことができてよかった。

普段の授業は東南アジアとインドに重点を置いていたように思う。海老やバナナの話は知っていたが、あれほどまでに東南アジアの国々が私たちの生活に密着していたとは驚きで、今まで知らずに過ごしてきた自分が恥ずかしかった。

また、NGOやODAについての知識も増やすことができた。特に、ODAに関する諸問題は予想していた以上に深刻で、早急に解決せねばならないものばかりだった。不正が起こりやすい、現地に見合った活動ができていない等々挙げればきりが無い。衝撃的だったのは、日本の政府が訴えられていることだった。ビデオや新聞記事を詳しくみていくうちに、怒りを通り越して悲しくなってきた。ODAの本来の目的は「経済成長による社会整備」であって、住民に喜ばれこそすれ憎まれたり、ましてや恨まれたりするものではないはずだ。ダム建設のために見知らぬ地へ移住した人、大切にしていたゴム園を捨てた人、これらの人々の気持ちを考えると、ODAなんてない方がましだとも思えてくる。

国際協力論を履修して第一に思うことは、援助される側の気持ちを一番に考えるがもっとも大切だということだ。私たちがよかれと思ってやっていることも、時と場合によっては迷惑となるのだ。相手を思いやる心・相手を気づかう心がなければ、国際協力はただの自己満足になってしまうことを学んだ。

授業で学んだこと—気持ちの高まりをもたらした内容—

多田 維久子 (ヨーロッパ・アメリカ学科、1年次生)

受講したきっかけは友達に誘われたことでした。授業内容を見て世界で困っている人たちのために私は何ができるのだろうと思い、この授業で勉強することを決めました。社会科は苦手な私ですが、南半球では難民が多いことは知っていました。しかしどのように困っているのかはあまり知りませんでした。

ODAには二国間援助と多国間援助の二種類があり、前者は相手国に直接協力しに行くもの。後者は

国連、国際機関を通じて協力するものだと学びました。これらの援助の中で二国間援助の技術協力は直接、相手の国へ技術者または専門的な人たちを派遣するので効率も良いし、現地の人たちとも親しくなれるので一番良い協力だと思いました。しかし、親切のつもりで造ったインドネシアのダムが村の人たちの生活を悪化させていることを知り、とても残念だと思いました。しかも移転の代償に一家庭1ヘクタールを約束したにもかかわらず、実際にはその一割しかなかったといいます。一件のダム計画で、その地域の全てのものを壊してしまったように思えました。また、南の国ではHIV感染者の増加が深刻な問題です。それは家計を支えるために売春婦になる妻、また売られていく娘たちがいるからです。そのため両親とも亡くなり、エイズ孤児が増えるわけです。とても悲しい現実です。ビデオでは「娘を売らなければならない」と嘆くお父さんの姿を目にしました。とても切なく、胸が痛くなりました。生きていくための仕方ない手段ではあるけれど、その度に死者は増え、国の発展は遠のいてしまいます。授業を受けるたびに問題はまだまだあり、深刻なのだと実感しました。そのように真剣に考える時間ももちつつ、国際協力に関わる人たちを呼んでお話を聞いたり、ゲームをしたり楽しみながら世界のことを学んだりしました。世界各国の家と家具の写真をテーブルに広げ、一人一枚好きなものを選び、その理由を発表したりしました。このことをとおして個性や好みが発見できるので面白いです。またインドのお茶は、見た目ミルクティのようでしたが、味は香辛料がきいてゴクゴク飲めるようなものではなかったです。様々な人の話を聞き、ビデオや資料を見、たくさんの刺激を受けた気がします。しかも生徒7人という少人数の授業だったからこそ皆とも話せました。そして近藤先生、野口先生共々ユニークな先生でした。私はこの授業を通して南の国の人たちのことが前よりは分かりました。そしてより一層困っているひとを助けたいという気持ちが高まりました。

実習報告：個を大切にする活動、被災地NGO協働センターを訪問して

多田 維久子 (ヨーロッパ・アメリカ学科、1年次生)

はじめは事務所訪問と聞き、ビルのようなものを想像していました。しかし、実際に訪れてみると手づくりっぽさや暖かさの伝わるアットホームな事務所とても和みました。そしてNGOらしさも感じました。きっと事務所で活動している人たちの心が建物に表れているのでしょう。私は事前にホームページを少しのぞかせてもらい、「まけないぞう事業」という活動に興味をもっていました。全国から寄せられた新品のタオルで「ぞうさん」形の手拭きタオルを作って販売するそうなのですが、三種類ほど形や大きさの違うものがあり、実際見させてもらいとてもかわいいと思いました。国内だけではなく、国外へ支援に行くときも持っていくそうです。それを受け取った人々はきっと励まされ、元気ももらえるような気がします。

NGO代表の村井さんからはNGOの基本的な知識や考え方を学びました。NGOは政府と深く関係し、時には政府に反対せざるをえない事もあり、また全体で物事を見るのではなく個を大事にするとも聞きました。

斎藤さんにはイランへ支援の事前調査へ行ったときのスライドをみせてもらいました。イランでは家が土などで造られているため地震が起きると、全てつぶれてしまい残された人たちは窒息死で亡くなってしまうことが多いそうです。スライドには崩れてしまった家や地震で家族をなくしてしまった人などが写っていて、それを見ていたら「そこへ行って何かできたら良いのに…」という気持ちにさせられました。今、自分は何不自由なく生活し、色々なものを与えられていてとても幸せなはずですが。それに対

してイランの人々は一日一日生きることに必死で、勉強することも特別で、一生懸命生きています。私たちは普段、そのような国や人がいることを忘れがちです。今回のNGO事務所訪問をきっかけに、普段の生活を見直し、常に世界を見て把握し「今、自分にできることは何か」ということを探していきたいと思います。

実習報告：すべてではなく、約でもなく、一人ひとりの声に耳をかたむける活動

鈴木 和果菜 (ヨーロッパ・アメリカ学科、1年次生)

◆村井雅清さんのお話

村井さんがこの被災地NGO共同センターを建てたのは阪神淡路大震災の時に救援物資を運んだのがきっかけ。農家の方々が毎日1万個のおにぎりを作ってくれて、それをみんなで食べていた。人間は1人では生きていけない、助け合って生きていくものだと実感したとおっしゃっていました。

【村井さんが大震災で学んだこと】

村井さん達は「災害救援NGO」とは思っていない。災害のことだけを考えていればいいだけではない。人権、教育、経済、環境など全てのことをNGOとして考えなければいけない。法律や制度が変わらないと変えていけないこともたくさんある。

NGOは一人一人の声、望みを正確にキャッチし、社会、政府、自分達の仲間に発信することが大切である。

- 最後の1人が助かるまで見守る。
- 人間は1人では生きていけない。支え合いは自立から。
- 自分で考え、自分で決める。
- 「すべて」「約」というひとくくりの考えではなく、「個」をみることが大事。
- 違いを認め、多様な考えを共有。

◆斎藤さんのお話

斎藤さんからは大地震があったイランを訪問した時のスライドを見ながら現在のイランの状況をお聞きしました。

M6.3の地震がバムという都市を襲った。人口9~10万人のうち4万2千人の市民が亡くなった。イランではレンガを積み重ねた家のためにすぐに壊れてしまう。亡くなった方のほとんどは土砂崩れが原因。今は家の中からまだ使えそうな服などを探している状態だそうだ。現地の人々は自分達のつちかってきた文化をこわしたくないと強く思っているから日本の近代技術を取り入れて家を建て直すわけにはいかない。だから、斎藤さん達は復旧作業をする際に知恵を出し現地の人々と共に考えていったりする。

ま と め

私は初めてNGOの事務所に行って詳しくNGOについてお話を聞くことができた。村井さんは予算が少ないのでNPO、NGOだけどうやって食べていくのかということがNGOの最大の課題だとおっしゃっていた。だから1つの団体にスタッフはせいぜい4~5人で正式な職員の採用は難しい。政府が資金援

助をすることはできないのだろうか。寄付金だけで運営していくのは確かに困難だと思う。

世界には大企業のトップの人達は大儲けしている一方で、一日1ドル以下で暮らしている人々も多くいる。このしくみを変えないと難民は減らない。まずはこのようなしくみが存在することや、どこに原因があるのかを知ることが大切だと思う。世界を支配したがつているアメリカについて行っている日本をまず変えていかなければいけないと考えている。今回この被災地共同センターに行って良かった。NGOについてもっと知りたいと思い、また今まで以上に飢餓や貧困について考えたいと思った。

国際協力論の授業風景



ボンバイ布教所所長の佐々木氏



海外部「国際たすけあいネット」事務局長の田中氏



被災地NGO協働センター事務局の斉藤さん



佐藤先生から話を聞く受講生一同

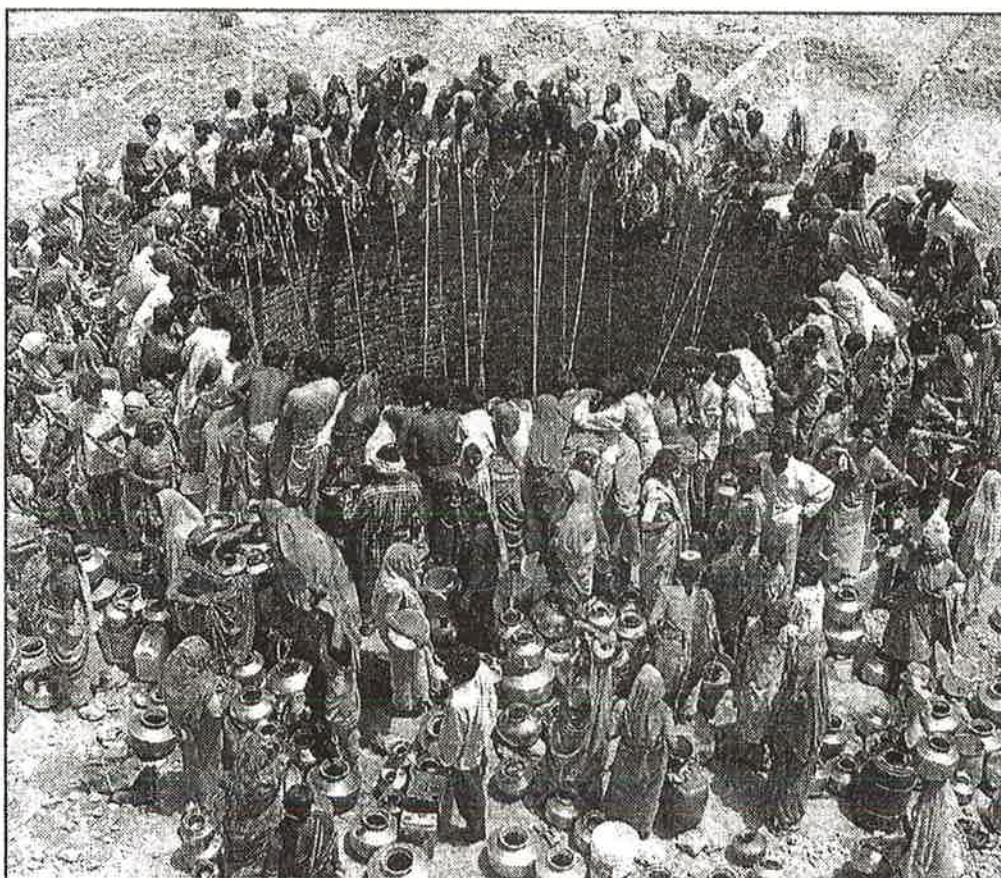
資料編



「群衆 井戸へ」(干ばつが続くグジャラート州の様子を伝える新聞記事)
「国際参加」プロジェクトへの参加者募集のためのパンフレット類
ジャムナガルJJSSから天理大学に届いた招請状
第3回「国際参加」プロジェクト参加者名簿
第3回「国際参加」プロジェクト日程表
荷物に貼り付けたヒンドゥー語による活動趣旨
アースバッグによるボンガ図書館設計図
「国際協力論(実習を含む)」の初年度シラバス
「国際協力論(実習を含む)」履修の呼びかけ
本プロジェクトを紹介する新聞記事(邦文)
本プロジェクト活動を紹介する現地新聞(インド、グジャラート語)

インド西部のグジャラート州とは、—水と教育—

地震が発生する前から、熱暑と干ばつに見舞われてきたグジャラート州。今年も、5月までは熱暑が続きましたが、6月からの雨期には大量の雨に見舞われました。



群衆 井戸へ

干ばつが続くインド西部グジャラート州の村で1日、井戸に群がって水をくもうとする人々＝写真、ロイター。同州の北、西部ではダムや井戸、池の多くが干上がり、住民

はセ氏44度にも達する猛暑の中、不定期にやってくる国営給水車を待つ。

インドの熱波は5月中旬から続いており、死者は約1千人に達した。5日の国連環境の日のテーマは「水——20億人が乾きで死に瀕（ひん）している」。

(2003年6月3日・毎日新聞)

「国際参加」プロジェクトへの誘い

インドの西部に位置するグジャラート州 ジャムナガルを中心とした地震救援から復興活動

本プロジェクトは、2001年の1月、インドグジャラート州に発生した地震の被災地救援活動として進めています。趣旨に賛同して、自主的に参加を希望する学生諸君に建学の精神に沿った国際協力に触れてもらう機会と場を提供します。

—内容—

参加者募集

第2回プロジェクト(今春)の活動報告と
来春(2月)の第3回プロジェクトの概要



月日 2003年10月2日(木) 17時～

場所 研究棟4階(東側) 地域文化研究センター

電話 0743-63-9077 メール icrs@sta.tenri-u.ac.jp

(担当者: 井上昭夫、佐藤孝則、近藤雄二、金子 昭)

ICRS 国際参加プロジェクト in India

天理大学地域文化研究センター (International Center for Regional Studies) TEL/Fax 0743-63-9077

インド西部グジャラート州における2001年地震被災地の復興活動(継続)

プロジェクトの理念と2004年2月の実施概要

国際参加プロジェクトは、

地域文化研究センターの「国際参加」プログラム推進部門が企画実施しています。

地域文化研究センターの「国際参加」プログラム推進部門は、天理大学の「建学の精神」^{*1)}を教学協働のもとに実践する教育研究の場として、国際参加と他者への貢献を通して、地球規模で共有、解決していかなければならないグローバル・イシューに触れ、地球人として一人ひとりが自覚し、個人ならびに組織として行動できる実践力を培うことを目的としています。

インドにおけるプロジェクト

2001年1月、インド西部グジャラート地方に大規模な地震が発生しました。地震被災地救援活動のために事前視察を踏まえて、当センターが主導して現地NGOの協力のもとに2001年8月、有志の学生とともに被災地の人々が必要とする建築モデル、日本庭園、チェックダムづくりのために汗を流してきました。被災地のなかでも農村部は、復興のための行政の手が充分でなく、2003年3月には第2回プロジェクトとして、建築中の復興小学校敷地内にアースバックを用いた図書館づくりに着手し、第1回目に建造した農業用水確保に欠かせないチェックダム(コンクリートの堰)が農作物に与えた影響を調べ、効果があることを確認してきました。

今回、第3回目のプロジェクトは、過去2回と同じ場所において実施します。小学校敷地内に3つ目の図書館をアースバックでつくるとともに新たなチェックダムに着手します。また、震源地ブジを訪問し、各国のNGOが救援のためにつくったセンターの見学も検討しています。

プロジェクトの内容

プロジェクトの期間は、2月21日から3月6日までの2週間。神殿参拝の後、ムンバイ(ボンベイ)に向けて出発し、活動の場グジャラート州のジャムナガルに入ります。ここに滞在して、現地NGOと協力して、ボンガやチェックダム造りをします。また歴史の街、ジャムナガルを歩くツアーや女子社会福祉施設訪問と交流、帰路、ムンバイで世界遺産を訪問する機会をもつ予定です。

学生の参加費は、後援会の援助により、実際にかかる費用の半額程度、10万円を予定しています(保険料、パスポートとビザ取得費用は別途)。

本プロジェクトに参加するには、

本プロジェクトの趣旨に賛同し、事前の研修会や参加学生同士の準備活動に積極的に参加できる本大学の学生であれば学年、学部を問わず参加が可能です。学生定員は20名です。

参加にあたっては、渡航経験、信者であるかどうかや語学力は問いません。いわゆる語学研修や異文化体験のツアーとは異なります。将来、国際的な関わりを持ちたい、国際NGO等で仕事をしたいと思っている方、貧困、内紛や人災等の災害で困っている地域で自分のできることで役に立ちたいと思っている方、貧困国や開発途上国でその地域の社会と暮らしに触れ、自分がどう思うか確認したいと思っている方、天理教の精神を掲げた天理大において海外での宗教的精神にもとづく活動に参加したいと思っている方、等、一人ひとりが自覚的、自発的に共に学び「他者への献身」に結びつけたい気持ちをもっていただくことが必要です。

本プロジェクトに参加した1年次生には、「国際協力論(実習を含む)」2単位の認定が可能

本プロジェクトに参加した本学1学年生については、申請すれば2003年度から開講された新カリキュラム「国際協力論(実習を含む)」2単位が認定されます。

後援会も応援

本プロジェクトは、在学生の保証人(両親等)の組織である後援会からも積極的な応援をいただいています。後援会独自に後援会会員の子弟に対して参加を要請する葉書を送付いただくとともに補助金をいただいています。

*1): 建学の精神とは(2001年、H.13.7.7)

親神は、「陽気ぐらし」をともに楽しみたいと思召されて、人間世界を創造された。教祖は、この元なる親神の存在と、世界一列きょうだいの真実を明かし、「ひながた」の道を通して、互いにたすけあう生き方を示された。

本学は、教祖の教えに基づいて、「陽気ぐらし」世界建設に寄与する人材の養成を使命とする。

建学の精神にもとづく教育目標

本学は、人間のふるさとである「ちば」の恵まれた宗教的環境のもとで、祈りと献身の生活を基盤とする教員、職員、学生のふれあいを通して、豊かな教養を体得させ、専門的学識を授けることを目標とする。

そのため、本学は人間学部、文学部、国際文化学部、体育学部を設置するとともに、学際領域研究の場を提供し、各人の資質を引き出し、伸ばすことを目指す。

実施概要と申込み

**2004年2月実施の第3回プロジェクト
—インド西部グジャラート州ジャムナガル—**

- 期 間** 2004年2月21日関空発、3月6日関空帰着
航空便によって、1～2日変更する可能性があります。
- 募集期間** 第1次募集 10月3日(金)～17日(金)
第2次募集 10月21日(火)～31日(金)
(第2次募集は、第1次募集で定員に満たなかった場合)
- 募集方法** 参加申込用紙に必要事項を記入して、申し込むこと
(申込用紙は、研究棟1階 教育支援部に提出のこと)
申込用紙は、教育支援部、地域文化研究センターにあります。
- 参加者の決定** 第1次募集者は、10月20日(月)に教育支援部と地域文化研究センターに参加決定者を掲示します。
- 参加決定者は、提出必要書類等を教育支援部で受け取り、期日までに必要書類等を提出して下さい。

前提

大学の健康診断を春に実施済みであることが前提です。
出発月から6ヶ月以上(2004年8月)の有効期限のパスポート(旅券)が必要です。
天理出発(神殿参拝)から天理解散(神殿参拝)まで全員での団体行動です。

出発までの事前活動—学生の自主的活動—

あくまでも国際参加に関心・興味のある学生諸君にその場を提供することが目的です。
参加学生は、1年次生～4年次生の各学部から構成されています。定員20名を超えた希望者があればセンター内で審査、参加者を決定します。

現地での活動は、ただ行くだけでは現地では役に立ちません、アースバックによる土囊建築のための技法を事前に理解、修得する必要があります。そのため、柚之内校舎前で建築中の土囊建築作業に参加してもらいます。

過去に国際参加プロジェクト-インド-に参加した学生を中心に学生連絡網を整備し、出発前から密に連絡を取り合い出発までの準備、技法の修得、買い出し等の作業を自主的にこなします。現地での昼食は、日本から持参した食料品で皆さんが炊事を行います(朝食、夕食はホテル)。

渡航手続き—詳細は、参加者決定後に資料を配付します—

渡航にかかわる手続き(パスポート)は、各自が責任をもって行ってください。

提出書類等は、次のものがが必要です。

保証人の承諾書
学生証のコピー
パスポート原本
パスポートのコピー1枚
海外渡航者健康管理票
参加費 10万円
ビザ取得費用 5～6000円
健康管理上、気になる症状や現症があれば渡航許可を記載した医師の証明書(該当者)
海外渡航健康調査(帰国1週間後提出)
参加レポート(帰国後)

今後のスケジュール

出発までに何回かのミーティングや事前研修を行います。その都度連絡します。

Trust Reg. No. F-42/Jamnagar Dt. 21-7-1966

Phone : 672978

SHRI JAMNAGAR JILBA SAMAJ KALYAN SANGH

(Gujarat State)

Near Mahila Hostel,
Kasturba Gandhi Marg,
Patel Colony,

JAMNAGAR - 361 008

Date 1 Feb - 2004

No. J. J. S. K. S.

617/04

To,

TENRI UNIVERSITY
JAPAN.

This is to invite Tenri
University students to Jamnagar,
Gujarat, India.

The students are supposed to work
in cooperation with local people in
Balachadi village to construct lounges
which are used as a library for the
Balachadi Primary School.

We, Shri Jamnagar Jilba Samaj Kalyan
Sangh heartily welcome for them to stay
in Jamnagar to realize the purpose of
their visit aiming at helping especially
farmers suffered by the earthquake
occurred in 2001.

Thank you very much, for
extending humanitarian help.

I would like to request you to continue
the humanitarian projects for the needy
& poor.

Thank you.



Honorary Secretary,
Jilba Samaj Kalyan Sangh
Jamnagar,

第3回「国際参加」プロジェクト参加者名簿

学生氏名	性別	学年	学科・専攻等
久保 智美	女性	1年次	人間関係学科
矢澤 智子	女性	1年次	歴史文化学科
沖 佳奈代	女性	2年次	人間関係学科
高木 宏明	男性	2年次	体育学科
田中 映理子	女性	2年次	中国学科
佐藤 綾香	女性	3年次	宗教学科
西村 俊祐	男性	3年次	宗教学科
本田 光美	女性	3年次	ドイツ学科
中山 真哉	男性	3年次	宗教学科
西山 拓司	男性	3年次	インドネシア学科
松尾 晃宏	男性	3年次	宗教学科
野田 麻美	女性	3年次	宗教学科
渡辺 豪	男性	3年次	ドイツ学科
苑田 昌嗣	男性	4年次	ドイツ学科
宮島 綾子	女性	4年次	ドイツ学科

協力技術者

河口 尊	天理教営繕部造園班
木内 健治	自営造園業、教友
江崎 貴洋	渡辺豊和建築工房、建築家

引率教員

隊長 近藤 雄二	本学教員、引率者
顧問 井上 昭夫	本学教員、引率者

★学年は、参加時（2004年2月）

【資料-第3回「国際参加」プロジェクト日程表】

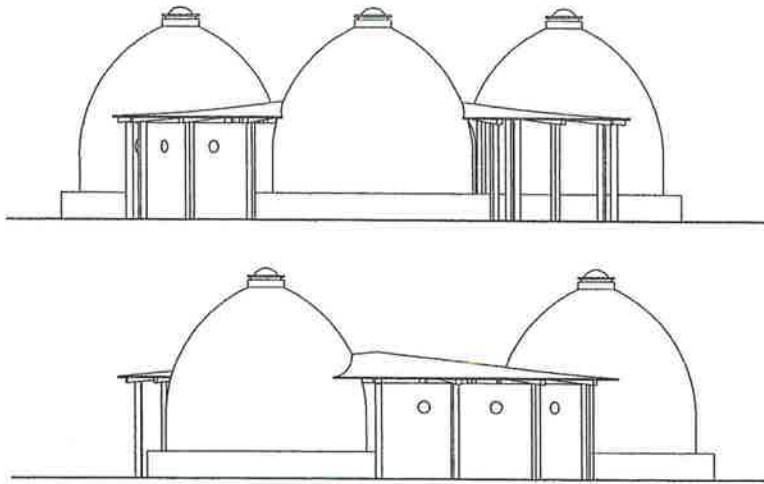
第3回「国際参加」プロジェクト

日程表

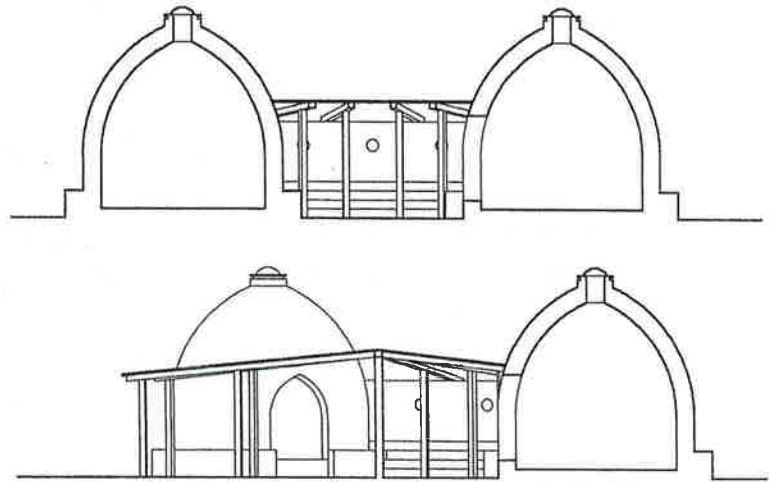
		TOUR NAME		DEP. DATE	RETURN DATE	DAYS	C/O
		2004 インド、ジャムナガル プロジェクト		2004/02/21	2004/03/05	14DAYS	
No.	日付	都市	交通	時間	内容		食事
1	2/21 (土)	天 理 関西空港 バンコク ムンバイ	TG-623 タイ航空 TG-317 専用車	11:10 発 15:30 着 19:25 発 22:20 着	07:00 天理集合、荷物積み込み、神殿参拝 07:30 天理出発(大学バス) 09:10 関西空港にてチェックイン 出国手続き後、一路バンコク経由ムンバイへ 入国手続き後、専用車にてホテルへ。 (CITIZEN HOTEL 泊)		朝 機内 昼 機内 夕 機内
2	2/22 (日)	ムンバイ ジャムナガル	専用車 IC-7147	10:05 発 11:05 着	ホテルにて朝食後、専用車にて空港へ チェックイン インド国内線にてジャムナガルへ		朝 ホテル 昼 夕
3 ~ 11	2/23 (月) ~ 3/2 (火)	ジャムナガル			ジャムナガルにてボランティア活動 HOTEL ARAM		朝 夕 昼食自炊
12	3/3 (水)	ジャムナガル ムンバイ	IC-7148 専用車	11:35 発 12:35 着	宿泊先より空港へ 国内線にてムンバイへ 到着後、専用車にてホテルへ 渡辺さんと合流 (Garden Hotel 泊)		朝 昼 夕
13	3/4 (木)	ムンバイ	専用車 TG318	23:40 発	ホテルにて朝食後、ムンバイ市内観光 (インド門等)夕方、天理教ムンバイ布教所 訪問。その後専用車にて空港へ 出国手続き後一路バンコクへ(機内泊)		朝 ホテル 昼 夕
14	3/5 (金)	バンコク 関西空港	TG-728	05:20 着 09:10 発 16:15 着	バンコク到着後、一路関西空港へ 関西空港到着後、バスにて天理へ(大学バス) 天理到着。神殿参拝、健康チェックの後解散。 ★-レポート提出 3/10-		朝 機内 昼 機内

गुजरात भुकंप
जामनगर
सहायता कार्यक्रम
तेन्री विश्वविद्यालय
जापान

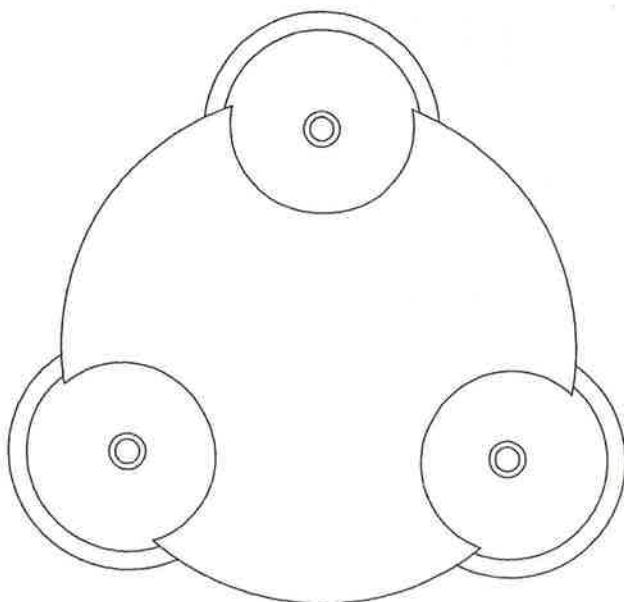
【資料一ボンガ設計図（渡辺豊和建築工房、江崎貴洋 氏作成）】



Elevation 1/100



Section 1/100



Roof 1/100

授業シラバス(2003年度)

国際協力論(実習を含む)

春期金曜 4限(2:45~4:15) 野口 茂¹⁾、近藤雄二²⁾
(¹⁾おやさと研究所、²⁾地域文化研究センター)

【授業目的】 本授業科目は、地域文化研究センターの「国際参加」プログラム推進部門が企画・実施しているプログラムの一つとして開講する国際参加・協力の入門、理論編です。

私達のまわりでは国際化や異文化理解のために、いろいろなことが行われていますが、互いにたすけあう献身的行為を通し、文化や言語をこえて地球的市民としてなすべきことを見出すことを目的とします。

【授業概要】 天災、人災、民族や宗教間の対立による紛争地域の人々の生活、また地球規模で起こっている環境汚染や砂漠化は、1つの国の内部だけでは解決が難しい問題となっています。こうした課題は、国家という枠を超え、世界の人々が共有して解決していかなければならないグローバル・イシューと言われています。

本授業科目では、グローバル・イシューにはどのような問題があり、なぜその問題が生じてきたかを学ぶとともに、これらの問題に対し、国際機関、各国政府・行政機関、個人や宗教、市民組織等の NGO 団体がそれぞれの特徴と役割を生かして様々な活動を進めている国際協力の形態と歴史、実際について学びます。これらを学ぶことを契機に、地球人として一人ひとりの自覚と参加が求められる社会のなかでの自分自身の生き方を本学の建学の精神、「他者への献身と実践」に結びつけて論じます。

【授業計画・方法】 授業は2人の教員が担当、進行するかたちでビデオ等も活用して進めます。学外(教内を含む)の国際協力活動に携わっている方々も招いて授業を構成します。

授業とは別に4月から12月にかけて3日間の学外実習を行います(国際協力事業団大阪国際参加センター訪問、NGO 訪問レポート等、)。なお、8月に2週間の予定でインドにおいて国際参加プロジェクトを実施します。受講生の参加をすすめます。

主なテーマ

なぜ「国際協力」が必要かー国際協力の必要性の背景ー

国際協力の精神、こころ

現代の貧困、グローバル・イシューとしての貧困問題

国際協力の内容、制度や方式

国際機関と国連機関

日本政府と国際協力(例えば、国際協力事業団と青年海外協力隊)

ODA、NPOとNGO

環境、教育、医療保健、開発、労働、文化、スポーツ、緊急援助

国際協力活動の実際、現状

国際NGOの取り組み

教内関係機関等の取り組み

その1 国際たすけあいネット

(天理教国際たすけあいネット事務局 田中善教)

その2 インドにおける教学協働の試み

(ボンベイミッションセンター所長 佐々木 則夫)

世界のNGO活動について

(海外災害救助市民センター(CODE)事務局 斉藤容子)

国際協力の今後

NPO法、NGO活動の展望

【成績評価基準】 出席、授業中に指示する課題レポート、実習レポートをもとに評価します。

【テキスト・参考文献】 テキストや参考文献は、授業開始後に紹介します。現時点における参考図書としては、以下の2冊を紹介します。

*国際協力の地平(NGO活動教育研究センター編、昭和堂、2002.5刊、¥2500)

*世界がもし100人の村だったら②(池田香代子&マガジンハウス、マガジンハウス、2002.6刊、¥1143)

【履修上の注意等】 単位取得には、授業とともに実習(学外)への出席、両者を満足することが必要。

全学部の1年次生諸君

国際参加の時代

国際協力論(時間割コード:C0249)を履修して 今夏、インドに行こう!!

問合せ先：天理大学地域文化研究センター(International Center for Regional Studies) Tel/Fax: 0743-63-9077

国際協力論(実習を含む)の授業科目は、全学部の1年次生に開放された新科目、

その実施は、地域文化研究センターが実施を担っています(春:金4限)。

春semester金曜日4時間目に開講される国際協力論(実習を含む)は、地域文化研究センターの「国際参加プログラム推進部門」が実施を担っています。この国際参加プログラム推進部門は、実践的活動を通じて研究・教育する部門で、2001年、インド西部地震被災地を対象にアースバックを用いたポンガの建築や水確保のためのチェックダム造成を現地NGOとともに行っていきます。

2001年から国際参加プロジェクトとして展開しており、全学部の学生に呼びかけ参加者を募ってきました。今年度からは、本授業科目が設置され、これにより国際的なボランティア活動の実績が単位として認定されます。

国際参加プロジェクトは、

地域文化研究センターの「国際参加」プログラム推進部門が企画実施しています。

地域文化研究センターの「国際参加」プログラム推進部門は、天理大学の「建学の精神」¹⁾を教学協働のもとに実践する教育研究の場として、国際参加と他者への献身を通して、地球規模で共有、解決していかなければならないグローバル・イシューに触れ、地球人として一人ひとりが自覚し、個人ならびに組織として行動できる実践力を培うことを目的としています。

2003年8月、インドにおけるプロジェクトとは、

2001年の1月、インド西部グジャラート地方において起こった地震の被災地救援活動のために、当センターが主導して現地NGOとの協力のもとに2001年8月、募集に応じた学生とともに被災地の人々が必要とする建築モデル、日本庭園、チェックダムづくりのために汗を流してきました。被災地のなかでも農村部は、復興のための行政の手が充分ではありません。2003年3月の第2回目プロジェクトでは、復興された小学校の敷地内にアースバックを用いて図書館と過去につくったモデル建築現場に日本庭園を造りました。

農業用水確保に欠かせないチェックダム(コンクリートの堰)による農業用水確保が農作物に与えた影響の現地大学との共同研究にも着手しました。

2003年8月の第3回プロジェクトは、これまでの活動を継続し、さらに発展させます。アースバックによるシェルター建築とともに、農業用水確保のため、あらたなチェックダムと井戸を現地NGOとともに着手します。多くの学生と教職員の参加を望みます。

本プロジェクトに参加するには、

本プロジェクトの趣旨に賛同し、事前の研修会や参加学生同士の準備活動に積極的に参加できる本大学の学生であれば学年、学部を問わず参加が可能です。ただ、1回あたりのプロジェクト学生定員(20名)があります。

参加にあたっては、渡航経験、信者であるかどうかや語学力は問いません。いわゆる語学研修や異文化体験のツアーとは異なります。将来、国際的な関わりを持ちたい、国際NGO等で仕事をしたいと思っている方、貧困、内紛や人災等の災害で困っている地域で自分のできることで役に立ちたいと思っている方、貧困国や開発途上国でその地域の社会と暮らしに触れ、自分がどう思うか確認したいと思っている方、天理教の精神を掲げた天理大において海外での宗教的精神にもとづく活動に参加したいと思っている方、等、一人ひとりが自覚的、自発的に共に学び「他者への献身」に結びつけた気持ちをもって参ることが必要です。

今年度の募集は、5月～6月を予定。参加費用は半額の10万前後。ポスターやホームページ等を通じて説明会等のお知らせをします。

国際協力論に登録・履修した学生は、

今夏、実施する国際プロジェクトに優先的に参加することができます。

本授業科目は、国際参加プロジェクトと一体化した教育プログラムです。本授業では、国内外で活動するNGOスタッフなどを招いての授業が展開されます。プロジェクトに関心のある方は、受講をおすすめします。また、8月のインドプロジェクトには、授業登録履修した者は優先的に参加することができます。これまでに活動してきた報告書やビデオ、またはアースバックのモデルの見学希望者は、地域文化研究センター(研究棟4階)までお問い合わせ下さい。

後援会も応援

本プロジェクトは、在学生の保証人(両親等)の組織である後援会からも積極的な応援をいただいています。これまでに全全ての後援会会員の子弟に対して参加を要請する葉書を送付いただくとともに補助金をいただいています。

*1): 建学の精神とは(2001年、H.13.7.7)

親神は、「陽気ぐらし」をともに楽しみたいと思召されて、人間世界を創造された。教祖は、この元なる親神の存在と、世界一列きょうだいの真実を明かし、「ひながた」の道を通して、互いにたすけあう生き方を示された。本学は、教祖の教えに基づいて、「陽気ぐらし」世界建設に寄与する人材の養成を使命とする。

建学の精神にもとづく教育目標

本学は、人間のふるさとである「ちば」の恵まれた宗教的環境のもとで、祈りと献身の生活を基盤とする教員、職員、学生のふれあいを通して、豊かな教養を体得させ、専門的学識を授けることを目標とする。そのため、本学は人間学部、文学部、国際文化学部、体育学部を設置するとともに、学際領域研究の場を提供し、各人の資質を引き出し、伸ばすことを目指す。

現地新聞（グジャラート語）に紹介された天理大学の活動

અંગ્રેજી પ્રેમીઓ સાવધાન

જામનગર પધારેલ જાપાનીસ વિદ્યાર્થીમાંથી એક જ અંગ્રેજીનો ખાણકાર: છતાં બધા સફળ

દાન હો તો એસા... શ્રમદાન એરે

જામનગર
જામનગર ખાતે શ્રમદાન કરી રહેલ જાપાનીસ વિદ્યાર્થીઓએ સ્વકમાઈમાંથી અચેત કરીને રૂ.૧,૮૦,૦૦૦નું દાન જામનગર જીલ્લા સમાજ કલ્યાણ સંઘને આપ્યું છે. ભાણવા સાથે પાર્ટટાઈમ કામ કરીને 'અર્થ' કાઢતા આ જાપાની વિદ્યાર્થીઓની દાનની ભાવનાને તો વખાણવા માટે જીલ્લા ઓછા પટે કારણ ખરીદી અને મોજમજ તથા મનોરંજનમાં કાપ મુકીને ભાણવા જેડે કમાવાનો બોજ વહન કરતા આ વિદેશી વિદ્યાર્થીઓએ આપણા શહેરમાં ફિપિયાના દાન જેડે શ્રમદાન પણ કર્યું છે. આમને વિદેશી કહેવાય ? આ તો છે સવાયા જામનગરના નાજરિકો.

યુનિ.ના વિદ્યાર્થીઓએ બાલાચડી ખાતે બાંધુ અને ચેરીબ્લોસમના વૃક્ષ રોપ્યા છે તો પરતીકેપ યુકે ઓછા અર્થના ડોંગા પણ બાંધ્યા છે. આટલું કરતા કરતા પુલ્કની રસોઈ જાતે બનાવી છે.

જામનગર જીલ્લા કલ્યાણસંઘે બીપીન વાધર, સ્માઈકભાઈ શાહ, હીરાબને તન્ના અને સાથીઓના માર્ગદર્શન હેઠળ એશિયન ડેવલોપમેન્ટ બેંક મહિલા ઉત્કર્ષ જળ સંચય કાર્યક્રમ દ્વારા રૂ.૧૩ લાખનું કામ કર્યું. જામનગર જીલ્લાના બાલાચડી ગામને એક સંપન વિસ્તાર તરીકે ઘડવે ત્યાં ડેવેકેડેમ બાંધી

ગામને મદદરૂપ થવાનો પ્રયત્ન કર્યો છે. જાપાનીઝ મિત્રોના શ્રમ અને દાનનું પગદાન બાલાચડી ખાતે ઉલ્લેખનીય છે.

સામ વિસ્તારના બાળકોની જરૂરિયાતને સંતોષવા સવલસર વાડી વિસ્તારમાં એક સુંદર શાળા પણ જાપાનીઝ મિત્રોના ધોગદાનથી બાંધવામાં આવેલ છે.

જાપાનની ટેનરી યુનિવર્સિટીના તત્ત્વજ્ઞાનના પ્રોફેસર તથા ડાયરેક્ટરે 'આજકાલ' જેડેની ખાસ વાતચીતમાં જણાવેલ કે હું કરતા કરેલ કમાયા હોય તેમ મો મલકતું હતું.

જામનગર ખાતે વહી વખત આવ્યો છું મારા ઘણા વિદ્યાર્થીઓ બીજી-ત્રીજી વખત સ્વકમાઈમાંથી અર્થ કરીને જાને ટીકીટ લઈ આવ્યા છે. અહીં તેમને જાડાની તકલીફ થઈ છે. છતાં તેની યાદ બાલાચડીના બાળકો દ્વારા મળેલ આદર સહારના કારણે નથી આવી વિદ્યાર્થીઓ ફરી-ફરી જામનગર આવવા માટે ઉત્સુક છે. પ્રો.ઈનોબ આકીયો આયુર્વેદયુનિ.ના પંચકર્મ વિભાગમાં સારવાર લઈરેલા છે.

જામનગર જીલ્લાની દરેક પ્રાથમિક

શાળામાં પણ લાયબ્રેરીનો આગવો ખંડ હોવો જેઈએ તેવું દ્રઢતાથી માનતા પ્રો.ઈનોબ આકીયો બાંધુના વાવેતર માટે

પરથી પદાર્થપાઠ લેવાની જરૂર છે. જાપાનીઝ વિદ્યાર્થીઓનું શિષ્ટ આસરુપર્શિગ્યું. આવા વિદ્યાર્થીઓની મુડી જે દેશ પાસે હોય તે ત્રિતીય વિશ્વયુધ્ધ દરમ્યાન ખવાસ થવા છતાં આગળ આવી શકે તેમાં કોઈ શંકા નથી. વિદ્યાર્થીઓ હોટેલ વિશાલ ખાતેના મિલન સમારંભમાં ગરબે યુમ્મા ઘણા બધાએ જડપથી સ્ટેપ પકડી પણ લીધા પોતાની ભાષામાં સોને જાપન સંભળાવ્યું ગણામાં સંઘ કાર્યવાહકોએ પહેરાવેલ ઘાર વિદાય સુધી પહેરી જ રાખ્યો. (આપણે ત્યાં ટેબલ પર છોડીને જવાની રસમ પરિવર્તન માગે છે. કારણ પહેરાવનારનું અપમાન થાય છે. જયારે જાપાનીસ તેમના વિશ્રામસ્થાને પહોંચ્યા બાદ જ ઘાર ઉતારીને સારા વજમાન બનતા બાબતે તો જીતી ગયા). આ વિદ્યાર્થીઓ તો ખાણે જામનગરમાં આપવા જ આવ્યા છે. જામનગર જીલ્લા સમાજ કલ્યાણ

સંઘની બેઠકમાં કાર્યવાહક સભ્યો, નિર્મતીતો અને સી કલકારોને આનંદથી ટીસ્ટથી નવાજતા રહ્યા. રંગબેરંગી ટીસ્ટ સ્મિત્ર સહ સોની જગ્યાએ જઈને એકસાથે આપવાની તેમની રસમ અદભૂત રહી. જાપાનીસ વિદ્યાર્થીઓ પીળા કેશરી અને વિદ્યાર્થીનીઓ લીલા કેશરી ઝભ્ભા સરીખા શર્ટમાં વિશાલ હોટેલ ખાતે મિલનમાં ઉપસ્થિત હતા.

મિલન અને બોલન સમારંભ પૂર્વે સંઘ કાર્યવાહકોની જાપાનીસ પ્રાંખાપકો તથા વિદ્યાર્થીઓ જેડેની બેઠકમાં ફૂલહારથી સ્વાગત કરાયું. અન્યોન્ય જેડે વિચારોની આપલે કરાય. લાંબા ગાળા માટે અંગ્રેજી બોલતા ફીખવાના જામનગર ખાતેના વર્ગમાં જેડાવા માટે પણ જાપાનીઝ વિદ્યાર્થીઓ વતી પ્રો.ઈનોબ આકીયોએ ઉન્ડંકા દાખવી. કોર્પકમનું સંચાલન જાપોનિબેન અનકકટે કર્યું હતું. અંગ્રેજી જાણતા જાપાનીઝની વાતચીતમર્મ જણાવેલ કે, અમે બધા પાર્ટટાઈમ કામ કરીને ભાણવાનો અર્થ કાઢીએ છીએ. સ્વપર્વે મુલાકાઈ કરી છે. ભારત અને જાપાનની સંસ્કૃતિમાં ઘણું સામ્ય છે. બાલાચડીના વતનીઓ અને ખાસ તો બાળકોએ આપેલ સામીપ્યની યાદ અમને જાપાન ખાતે પણ સંતાવસે

જાપાનીસનો અદ્ભૂત વૃક્ષપ્રેમ

જાપાનનું રાષ્ટ્રીય વૃક્ષ ચેરી બ્લોઝમ છે. જામનગર ખાતે પધારેલ જાપાનીઝ ડેલીગેશનના વડા પ્રો.ઈનોબ આકીયોએ હીરાબને તન્નાને સંભારણાના પ્રતીક સ્વરૂપે બાંધુ અને ચેરી બ્લોઝમનો છોડ ભેટ આપ્યો. સમાજ કલ્યાણના સંઘની વાલકેશથી નગરીમાં બંધાતી નવી ઈમારતમાં બાંધુનું વૃક્ષારોપણ મોટા પ્રમાણમાં જાપાનીઝ ડેલીગેશને કર્યું છે. તો બાલાચડી ખાતે ૧૦૦ જેટલા બાંધુ વાળ્યા છે. ૩ વર્ષ પહેલા વાલેલ બાંધુ મોટા ઘયાની વાત કરતા પ્રો.ઈનોબ આકીયોનો પશચા કશખલેના પર્થાવરણ માટેનો પ્રેમ પણ સ્પષ્ટ જાણ્યો. બાંધુની સાઈઝ વધ્યાની વાત કરતા કરેલ કમાયા હોય તેમ મો મલકતું હતું.

મુલાકાત જ્યોતિ દોશી

જામનગરમાં ખાસ ભાર મૂકે છે. તેમની જેડે ટેન્ની યુનિ.ના આરોગ્ય અને રમત-રમત વિભાગના પ્રોફેસર યુજીકોન્ડો (પી.એચ.ડી.) પણ આવ્યા છે.

વિદ્યાર્થીઓ તથા વિદ્યાર્થીનીઓના યુગમાંથી એક જ વિદ્યાર્થી ભાંધુ તુટ્યું અંગ્રેજી બોલી શકે છે. આપણા અંધ અંગ્રેજી ભાષાના પ્રેમીઓએ આ બાબત

発行日 2004年 6 月26日
発行 天 理 大 学
編集 天理大学地域文化研究センター
International Center for Regional Studies(ICRS)
〒632-8510 天理市柚之内町1050
Tenri University,Nara,632-8510 Japan
Tel/Fax 0743-63-9077 E-mail icrs@sta.tenri-u.ac.jp
Web:<http://tenri-u.ac.jp/ja/center/icrs>
印刷所 (株)高速オフセット